

原町市内遺跡発掘調査報告書 4

平成10年度試掘調査

竹花A遺跡（第3次調査）

泉廃寺跡（第8次調査）

泉廃寺跡（第10次調査）

前屋敷遺跡（第3次調査）

新橋横穴墓群

1999年3月

福島県原町市教育委員会

原町市内遺跡発掘調査報告書4

平成10年度試掘調査

竹花A遺跡（第3次調査）

泉廃寺跡（第8次調査）

泉廃寺跡（第10次調査）

前屋敷遺跡（第3次調査）

新橋横穴墓群

1999年3月

福島県原町市教育委員会

序

文化財は、わが国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、原町市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつあります。その一方、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、図面や写真などによる記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成10年度に、国及び福島県の補助金を得て実施した市内遺跡発掘調査事業の試掘調査の成果報告書です。今後この報告書を、埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、地権者の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました方々に心から感謝いたします。

平成11年3月

原町市教育委員会

教育長 鈴木清身

例 言

1. 本報告書は、平成10年度に実施した原町市内遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は、国及び福島県の補助金の交付を得て原町市教育委員会が実施した。
3. 本報告書の執筆及び編集は、原町市教育委員会生涯学習部文化課の鈴木文雄、堀 耕平、荒 淑人が行った。
4. 遺物の実測・トレースは、担当職員その他、安達訓仁、久松舞子、佐藤祐子、綱川裕子が行った。瓦の採拓は久松舞子が行った。
5. 試掘調査にあたっては、次の機関及び個人から協力を得た。
福島県農林事務所、原町市土地改良区、高平ほ場整備施行委員会、高山美富、佐藤信之、石橋正男、新妻晴一、佐藤富雄、新妻正光、高野勝芳、佐藤一夫、小野田健二、佐藤美保子、星見文哉、横山光一、羽山ハナ、佐藤三郎
6. 試掘調査、報告書作成にあたり、次の機関及び個人から指導、助言を得ている。
福島県教育庁文化課、磯村幸男、大塚初重、岡田茂弘、平川 南、玉川一郎、木本元治、宍戸弘治、佐藤耕三、松田隆嗣、桑原滋朗、鈴木 啓、寺島文隆、辻 秀人、佐川正敏、村田晃一、藤沢 敦、高橋誠明、藤井裕二、大谷 基、斎藤美穂、岩谷こずえ、藤原妃敏、安田 稔、森 幸彦、飯村 均、小野田義和、長島栄一、荒木隆嗣、猪狩忠雄、川田 強、岡田清一、岩崎真幸、辻 史郎、佐藤友之、松本太郎、大金宣亮、大橋泰夫、中山 晋、佐藤仁司、伊藤邦弘、丸山晶子、齋藤 健、水戸弘美、植松暁彦、糸原 清
7. 調査で得られた資料は、原町市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図作成に際しては以下の記号・略号を使用した。
T：トレンチ、掘：掘立柱建物跡、溝：溝跡、住：竪穴住居跡、柱：一本柱列、坑：土坑

目 次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査遺跡	1
第2章 試掘調査及び調査成果	2
第1節 竹花A遺跡（第3次調査）	2
第2節 泉廃寺跡（第8次調査）	8
第3節 泉廃寺跡（第10次調査）	13
第4節 前屋敷遺跡（第3次調査）	33
第5節 新橋横穴墓群	39

報告書抄録

第1章 調査遺跡

平成10年度の国・県補助事業に係る調査遺跡は4遺跡5か所である。高地区の竹花A遺跡(1)は、民間のトラックターミナル工場・事務所用地造成に係る調査である。泉廃寺跡第8次調査(2)、第10次調査(3)は、県営ほ場整備事業に係る内容確認の調査である。前屋敷遺跡第3次調査(4)は、民間宅地開発に係る調査である。新橋横穴墓群(5)は、農道付替え工事に係る調査である。



図1 調査遺跡位置図

第2章 試掘調査及び調査成果

第1節 竹花A遺跡 (第3次調査) (遺跡番号20600162)

所在地 原町市高字山梨84

調査期間 平成10年4月17日から6月1日まで

対象面積 5,133.99㎡

調査面積 930㎡ (試掘率18.1%)

事業内容 トラクターミナル工場・事務所用地造成に係る保存協議資料を得るための試掘調査

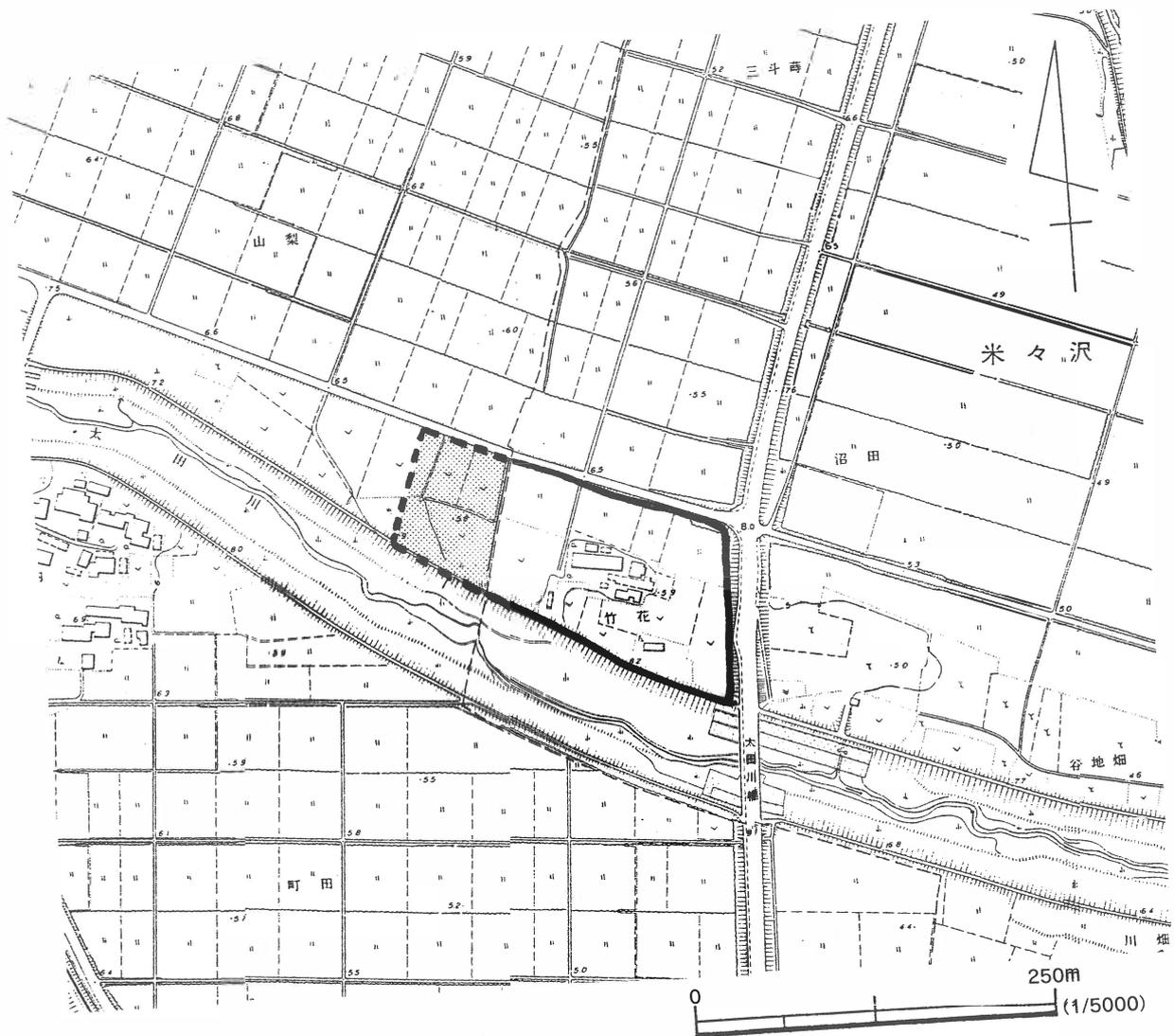


図2 竹花A遺跡と第3次調査区

調査担当 堀 耕平

遺跡概要

本遺跡は、太田川下流左岸の氾濫原に立地する遺跡で、昭和62年2月、分布調査により発見された遺跡である。標高は約10mを測る。これまで2次にわたる試掘調査が実施されている。第1次調査は、平成元年6月、大甕地区は場整備事業に係る範囲確認調査として実施している。今回の調査対象地の東側にあたり、トレンチ5本、調査面積は78㎡であった。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒が検出された。第2次調査は、平成7年に、高地区は場整備事業に係る範囲確認調査である。今回の調査対象地の西側にあたる。調査の結果、遺構は検出されず、奈良・平安時代の土師器・須恵器、鉄滓が少数出土したにとどまった。

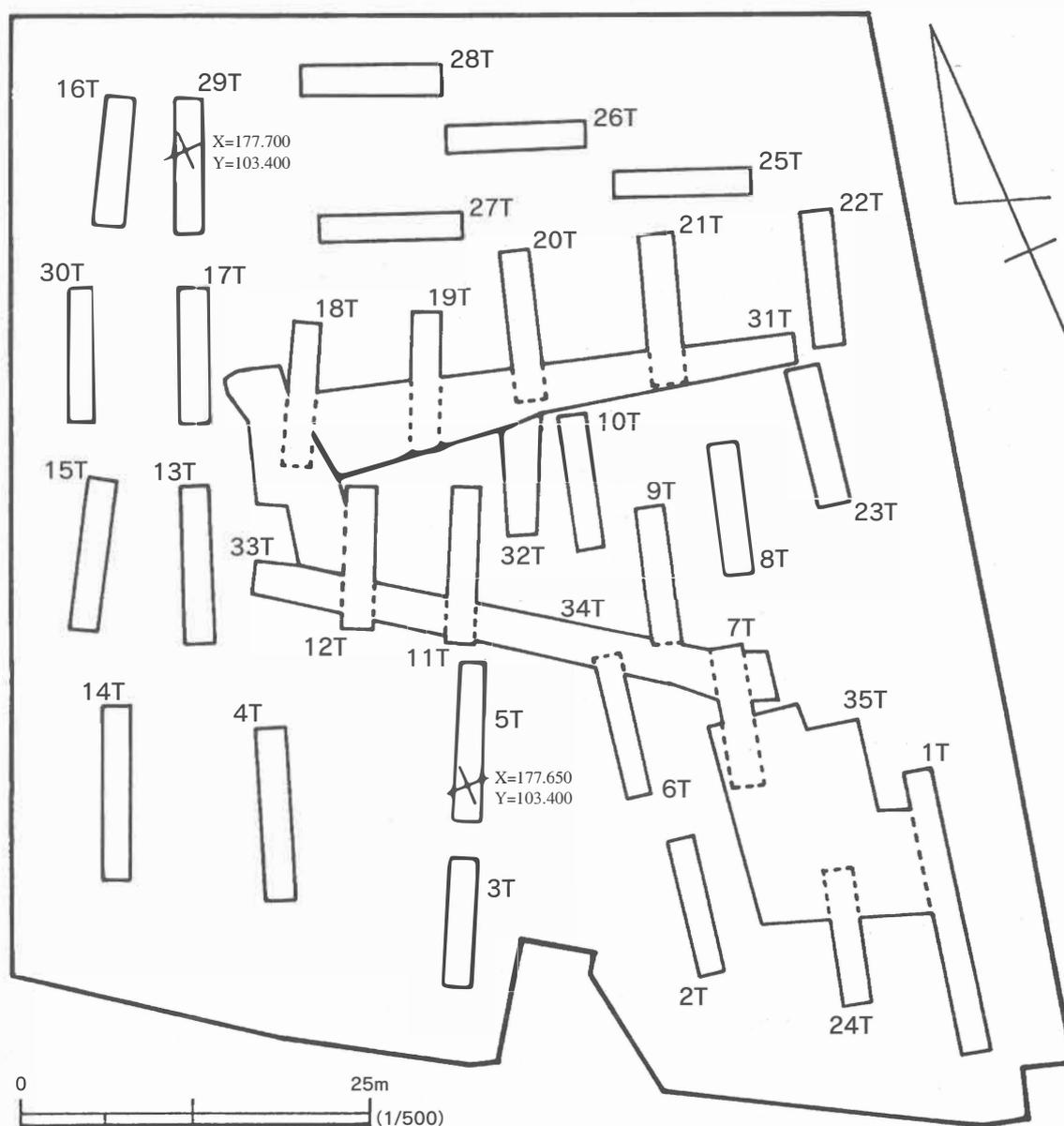


図3 竹花A遺跡第3次調査トレンチ配置図

調査概要

2×10メートルの大きさを基本に30か所にトレンチを設定した。第6・7・10～12・19～21号トレンチで溝跡が検出されたが、時代及び範囲が不明であったので、これを確認するため、トレンチの拡張を行い、拡張した部分についてトレンチ番号を付した。検出した溝跡については形態等確認のため、土層観察用のベルトを除いて掘りあげた。

調査成果

遺構は奈良・平安時代以降の溝跡9条が検出された。

第1号溝跡は第31号トレンチ東半で検出された。東西方向に長さ約22mまで確認した。幅約1m、深さ約20cmを測る。出土遺物は無い。

第2号溝跡は第31号トレンチ西半で検出された。東西方向から曲線を描いて南側に曲がる。東西方向部分で幅約50cm、深さ約20cm、南北方向部分で幅約30cm、深さ約15cmを測る。口クロ製作の土師器杯2片・赤焼き土器杯2片が出土した。

第3号溝跡は第31号トレンチ西半で、第2号溝跡の南側に沿って検出された。幅約50～

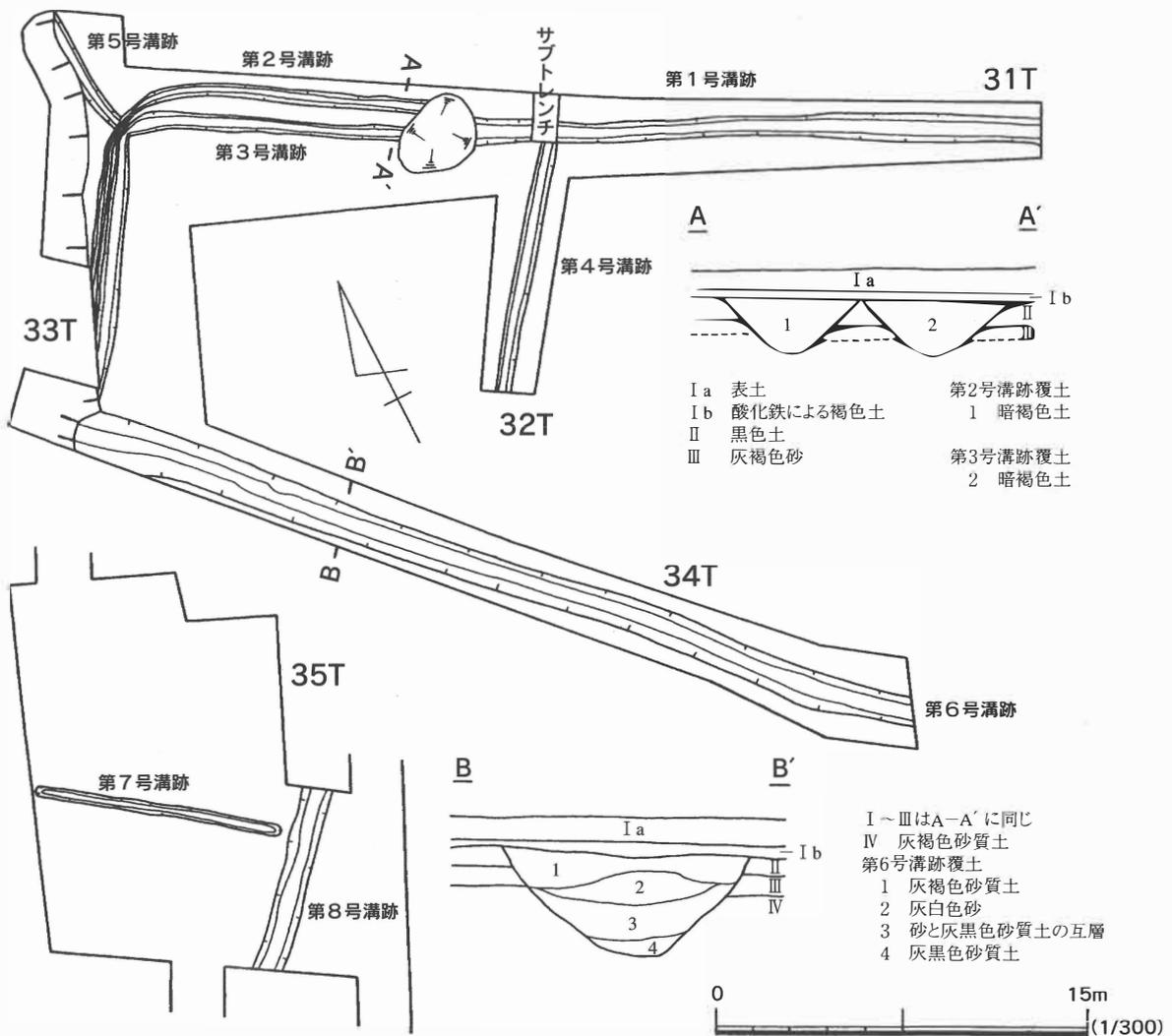


図4 竹花A遺跡検出溝跡

70cm、深さ約15cmを測る。赤焼き土器杯1片が出土した。

第4号溝跡は第32号トレンチで検出された。南北方向に長さ約10mまで確認した。幅約60cm、深さ約15cmを測る。出土遺物は無い。第1号溝跡と第2・3・4号溝跡との交点は最近のゴミ穴で攪乱されており、新旧関係は確認できないが、覆土が同様であることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。

第5号溝跡は第33号トレンチで検出された。第2号溝跡の北西角から分岐し、北西方向に延びている。幅約50cm、深さ約15cmを測る。ロクロ製作の土師器杯1片が出土した。

第6号溝跡は第34号トレンチで検出された。東西方向に長さ約35mまで確認した。幅約1.2～2.0m、深さ43～64cmを測る。ロクロ製作の土師器杯6片・須恵器甕1片が出土した。

第7号溝跡は第35号トレンチで検出された。東西方向で長さは約10mであった。幅約50m、深さ10～15cmを測る。出土遺物は無い。

第8号溝跡は第35号トレンチで検出された。南北方向に長さ約7.5mまで確認した。幅約1.1m、深さ約20cmを測る。出土遺物は無い。

溝跡出土の土師器は全てロクロ製作であることから、溝跡の時期はおおむね奈良・平安時代と推定される。

遺物は土師器43片、須恵器6片、赤焼き土器10片、陶器14片、鉄滓3点で合計76点が出土した。土師器は非ロクロ製作の杯1片・高杯脚部1片・甕1片・筒形土器1片、ロクロ製作の杯23片・高台付杯1片・鉢1片・甕14片である。須恵器は杯1片・甕5片である。陶器は碗類5片・土瓶2片・瓶類1片・鉢類5片・摺鉢1片である。出土遺物はいずれも小片であるが、このうち8点を図示した。

1・2はロクロ製作の土師器杯で内面にミガキと黒色処理を施している。切離し技法は回転糸切りで、再調整は施していない。3はロクロ製作の土師器高台付杯であるが、再酸化の

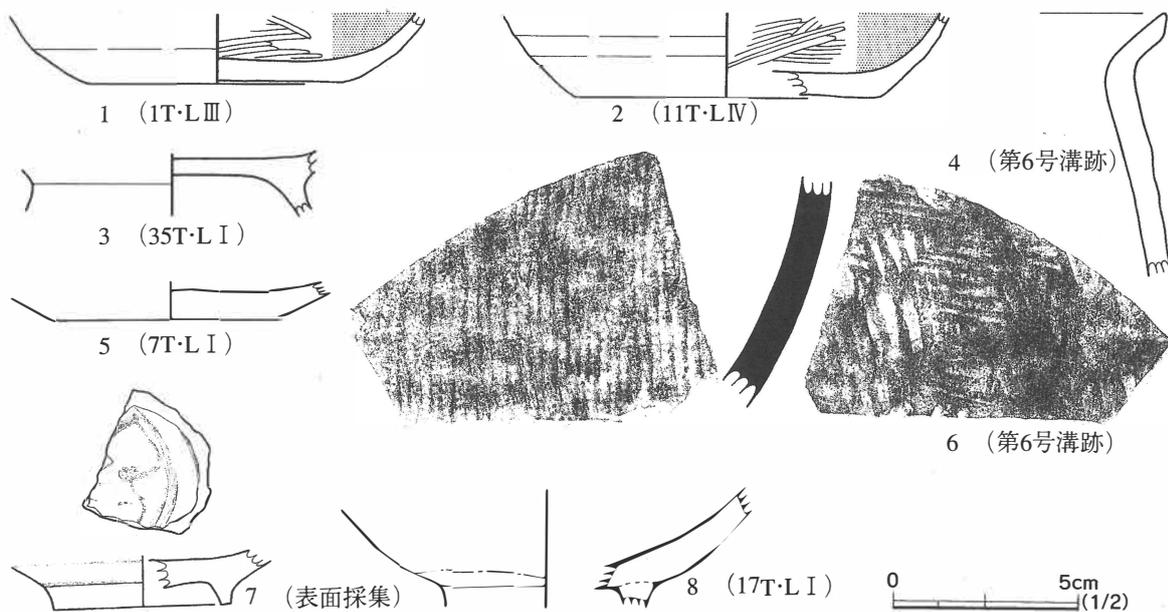


図5 竹花A遺跡出土遺物

ため、黒色処理は失われている。4はロクロ製作の土師器甕である。5はロクロ製作の赤焼き土器で、底部は回転糸切離し後ヘラケズリが施されている。6は須恵器甕である。以上は平安時代の遺物と考えられる。7・8は瀬戸・美濃系陶器で、7は染付に透明釉を、8は鉄釉を施釉している。胎土はいずれも緻密である。18世紀第4四半期から19世紀第1四半期に位置付けられる。陶器にはこの他、大堀相馬焼の銅青磁釉土瓶・灰釉香炉・灰釉碗・鉄釉切立、産地不詳の鉄釉線刻鉢の破片も出土している。

所 見

遺構密度は高くないが、奈良・平安時代の溝跡や遺物が検出された。第2・3・5・6号溝跡の西端は、地形が急に落込んでおり、これより西側では、遺構は無いと想定されることから、調査対象地のうち東側約3,600㎡が遺跡の範囲である。

開発に際しては、工法対応が望ましいが、掘削を伴う場合には発掘調査が必要である。



写真1 遺跡近景(西から)



写真2 第1号溝跡(東から)



写真3 第2・3・5号溝跡(北から)



写真4 第4号溝跡(北から)



写真5 第6号溝跡(西から)



写真6 第7・8号溝跡(東から)

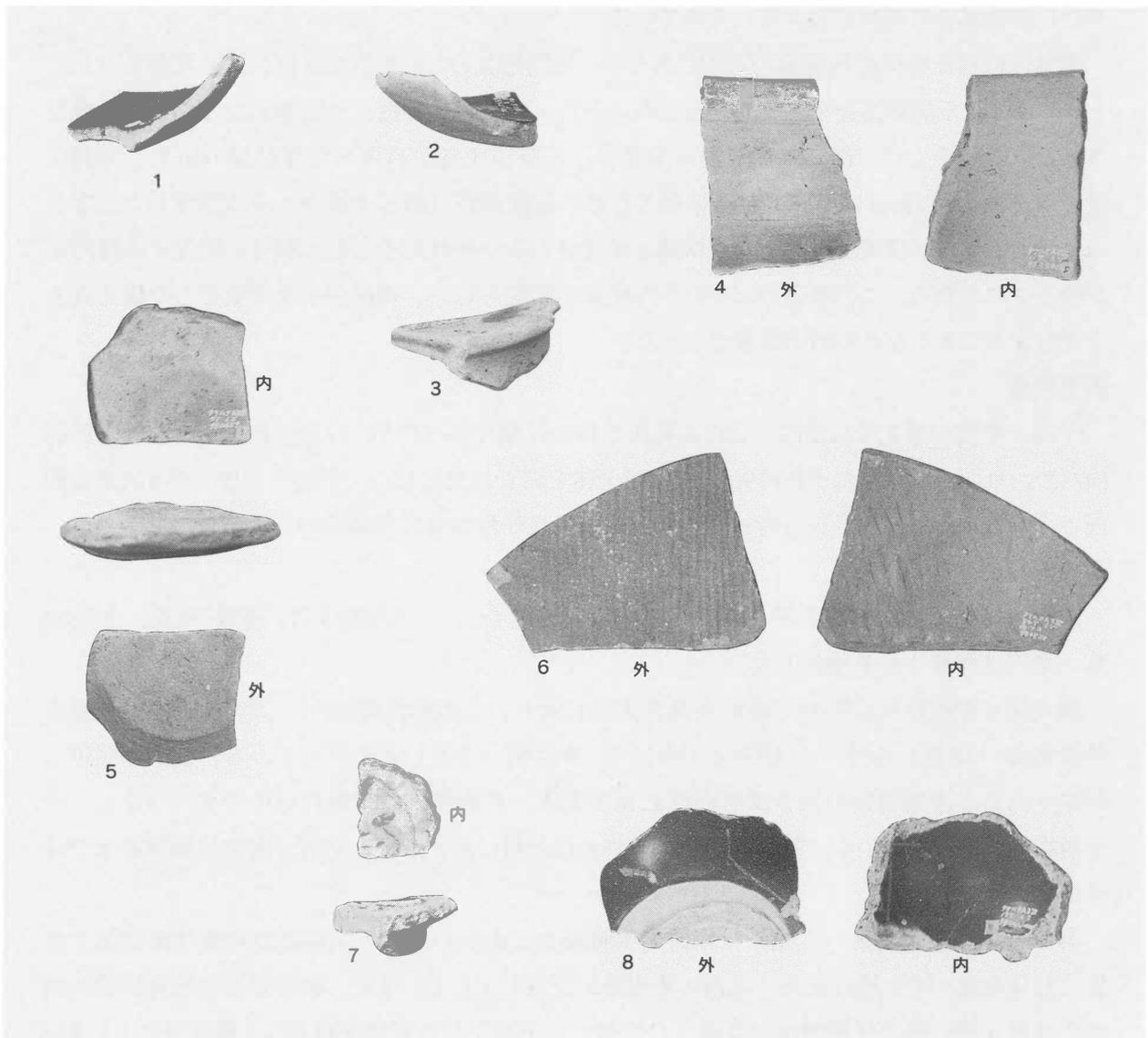


写真7 竹花A遺跡出土遺物

第2節 泉廃寺跡（第8次調査）（遺跡番号20600097）

所在地 原町市泉字町池416、421～427、433～436

調査期間 平成10年6月9日から12月15日まで

対象面積 約8,000㎡

調査面積 約8,000㎡

事業内容 県営ほ場整備事業に係る保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平・荒 淑人・安達訓仁

遺跡概要

本遺跡は新田川左岸の沖積地から河岸段丘面に立地している。これまで県営ほ場整備事業などに伴い7次にわたる試掘調査、発掘調査を実施してきた結果、院を区画する一本柱列、正倉跡と推定される掘込地業と区画溝跡などが検出されたことから、奈良・平安時代の行方（なめかた）郡衙跡の可能性が強くなってきている。

本地区は福島県史跡指定地の西側にあたり、範囲確認のため平成9年度に第6次調査としてトレンチによる試掘調査を実施したところ、奈良・平安時代の掘立柱建物跡などの遺構が検出された。これを受けて福島県相双農林事務所、原町市土地改良区と保存協議の結果、掘削を受ける範囲約6,500㎡について記録保存のための発掘調査（第8次調査）を実施することとなった。ところが、調査を進めるなか堀跡と推定される一本柱列やこれに取付く状況で八脚門跡が検出されたため、この取扱いについて再度保存協議を行い、遺跡保存を前提とした確認調査を実施することとなり今回の調査となった。

調査概要

平成9年度の調査では掘削を受ける範囲が調査対象であったが、今回の調査では面的な確認のため、東西、南北それぞれ約90mの範囲全体を調査対象とした。平成9年度の第8次調査範囲と重なり、調査を引き続き行ったことから、調査呼称は第8次調査のままとした。

調査成果

調査の結果、掘立柱建物跡34棟（八脚門1棟を含む）、一本柱列3列、溝跡99条、土坑22基、竪穴住居跡1軒を検出した。

調査区やや西寄りに第38号溝跡が南北方向に走り、この東側南寄りに八脚門（第10号掘立柱建物跡＝10掘）を伴う一本柱列（第1号一本柱列＝1柱）が位置している。柱列は堀跡と想定される。南側柱列の長さは半町約52mを測る。八脚門跡は南側柱列の中央ではなく、やや西寄りに取付いている。堀跡の両角はそれぞれ北側に曲がるが、北側の掘立柱建物跡までは延びていない。

第5号掘立柱建物跡（5掘）は堀跡の中軸線上にあり、第6・7号掘立柱建物跡は第5号掘立柱建物跡のそれぞれ北東、北西の等距離に位置している。また、第5号掘立柱建物跡の南西には南北棟の掘立柱建物跡が直線上に位置し、正面及び右側は空間が広く確保されている。

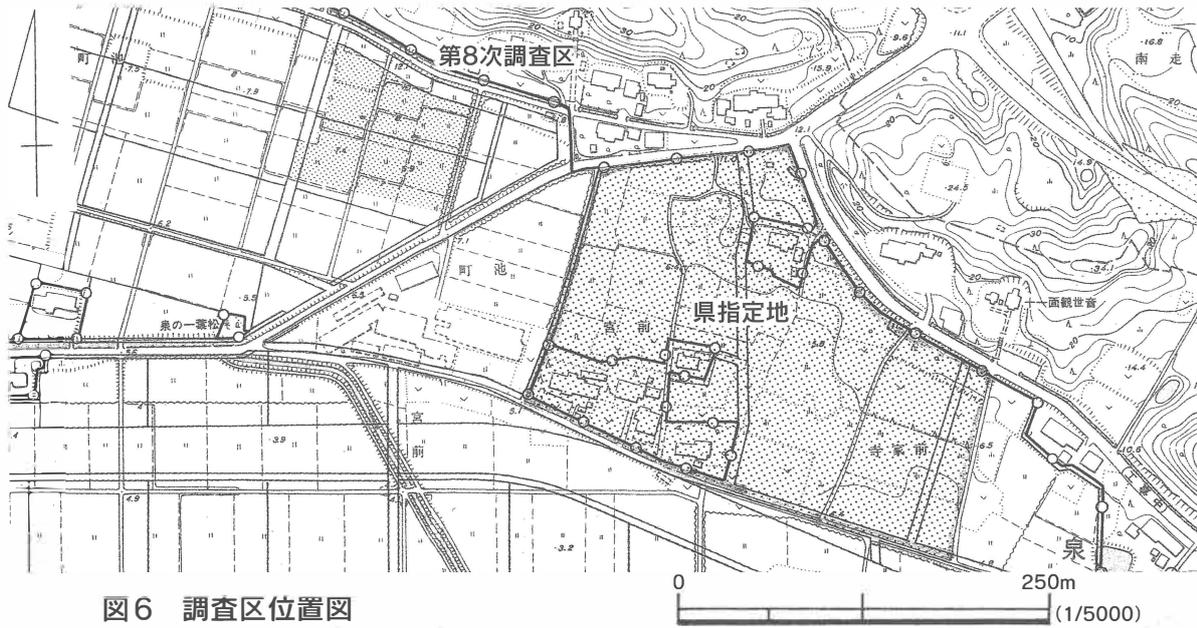


図6 調査区位置図

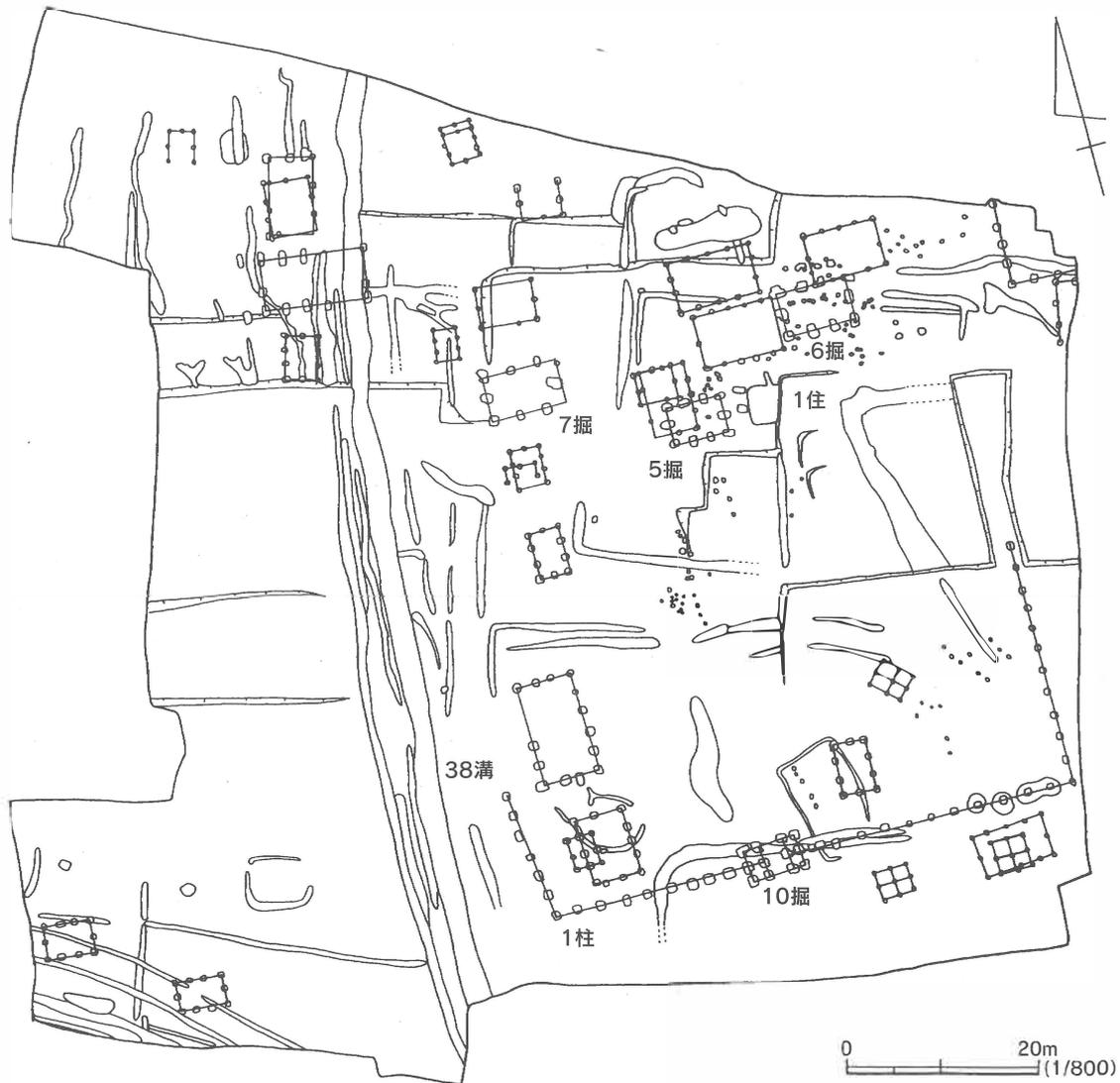


図7 泉廃寺跡第8次調査遺構分布図

さらに、第5号掘立柱建物跡から北側の建物は東西棟になっている。

以上、第5・6・7号掘立柱建物跡及び八脚門を伴う第1号一本柱列は位置関係において規格性が認められることから、院の一つを形成すると判断できる。

遺物は奈良・平安時代の土師器・須恵器など天箱で11箱が出土した。瓦はほとんど出土していない。

所 見

確認調査の結果、本地区が非常に重要な性格を示していることから、ほ場整備施工にあたっては、遺跡保護・保存のため、盛土等の工法対応を必要とする。



写真1 調査区近景(西から)



写真2 調査区全景(上が北)



写真3 掘立柱建物跡群(上が北)



写真4 第38号溝跡(南から)



写真5 第1号一本柱列(東から)



写真6 八脚門跡(西から)



写真7 八脚門跡掘方(東から)



写真8 八脚門跡掘方断面(西から)

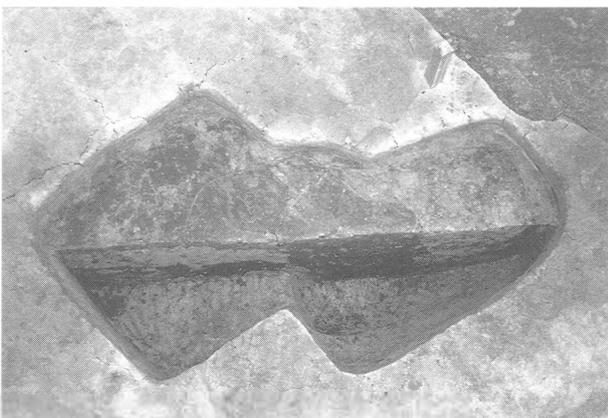


写真9 八脚門跡掘方断面(南西から)



写真10 第1号一本柱列掘方断面(東から)



写真11 第5号掘立柱建物跡(西から)



写真12 第5号掘立柱建物跡掘方断面(南西から)



写真13 第6号掘立柱建物跡(西から)



写真14 第7号掘立柱建物跡(西から)



写真15 第1号竪穴住居跡(南から)



写真16 出土軒丸瓦

第3節 泉廃寺跡（第10次調査）（遺跡番号20600097）

所在地 原町市泉字館前87-1、88-1、89-100、109、前川原633-1、634-1、635-1
636-1、637-1、638-1、639-1、640-1、641-1、642-1

調査期間 平成10年6月8日から8月26日まで

対象面積 15,000㎡

調査面積 3,200㎡（試掘率21.3%）

事業内容 県営ほ場整備事業に係る保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 荒 淑人・安達訓仁・久松舞子

遺跡概要

第10次調査区域（館前地区）は、これまで館前遺跡や惣ヶ沢廃寺跡などと呼ばれ、特異な文様をもつ瓦が採取されることで知られていた。当時は泉廃寺跡の中心部分と考えられていた県指定範囲から直線距離で約500mほど離れていることから、泉廃寺跡とは別の遺跡とし

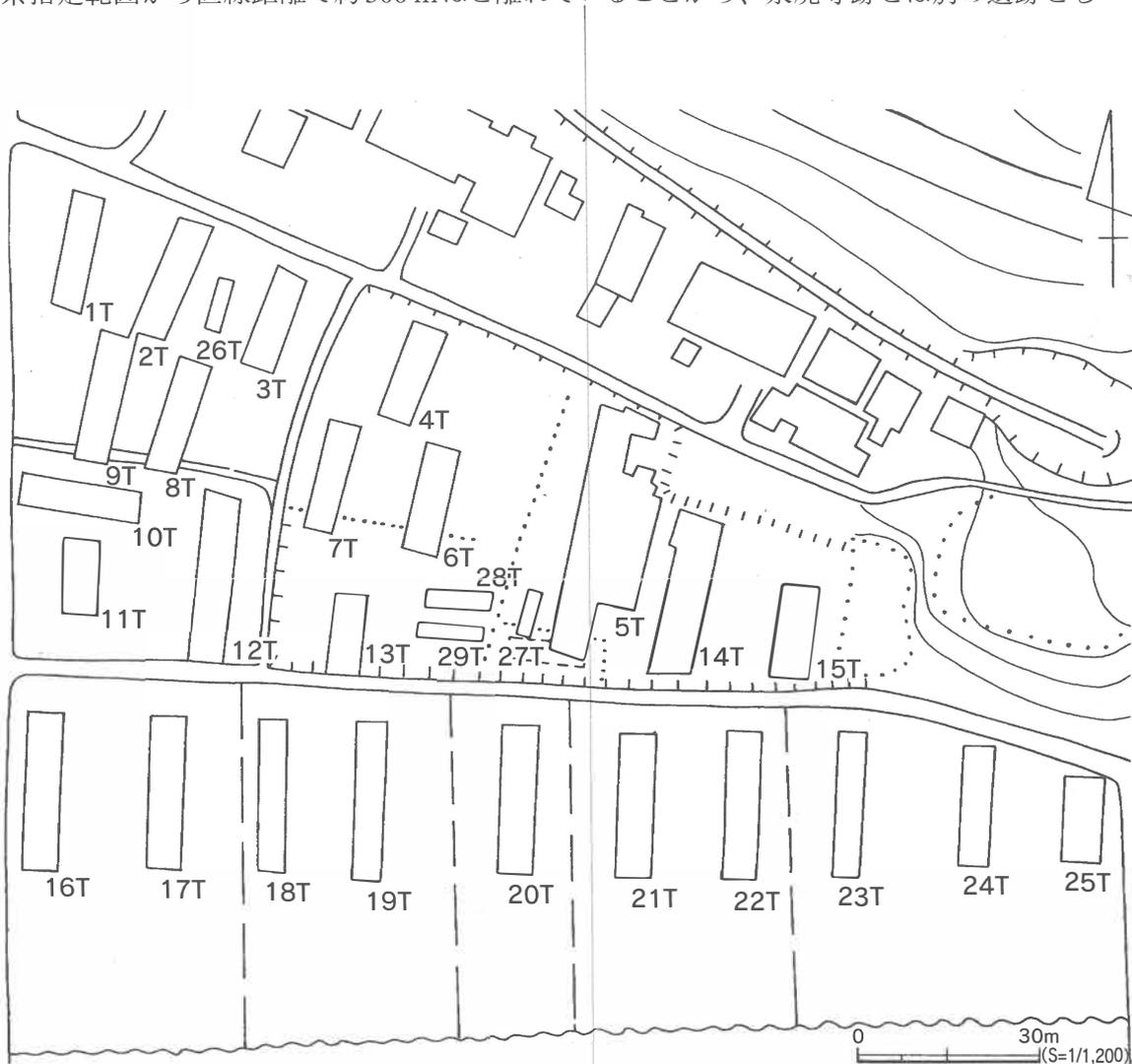


図8 トレンチ配置図

て考えられていたが、近年の発掘調査により、泉廃寺跡に関連する遺構や遺物は県指定範囲以外の広範囲からも発見され、県指定範囲と館前地区との間に空白地帯がなくなったことから、館前地区も泉廃寺跡の範疇として考えられるようになった。

調査概要

調査はトレンチによる遺構の確認を原則としたが、状況によっては断割りを行ったものもある。トレンチは、幅5m・長さは任意のものを合計29本ほど設定した。また、遺構の検出状況によっては、トレンチの拡張や、新たに小規模なトレンチを設定し、内容の把握に努めた。調査の成果としては、掘立柱建物跡や溝跡などの遺構とともに、多量の瓦が出土した。

調査成果

遺構 掘立柱建物跡4棟・溝跡15条・瓦溜1基・土坑7基・井戸跡5基・整地層・ピット多数
 遺物 瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼板・埴)・土師器・木簡・中世陶器・カワラケ・用途不明鉄製品

今回の調査では、4棟の掘立柱建物跡や溝跡を検出した。現在、泉廃寺跡において確認されている建物群としては、最も東に位置する建物群であり、これらと密接に関連した機能をもった建物群であることを推定させる。

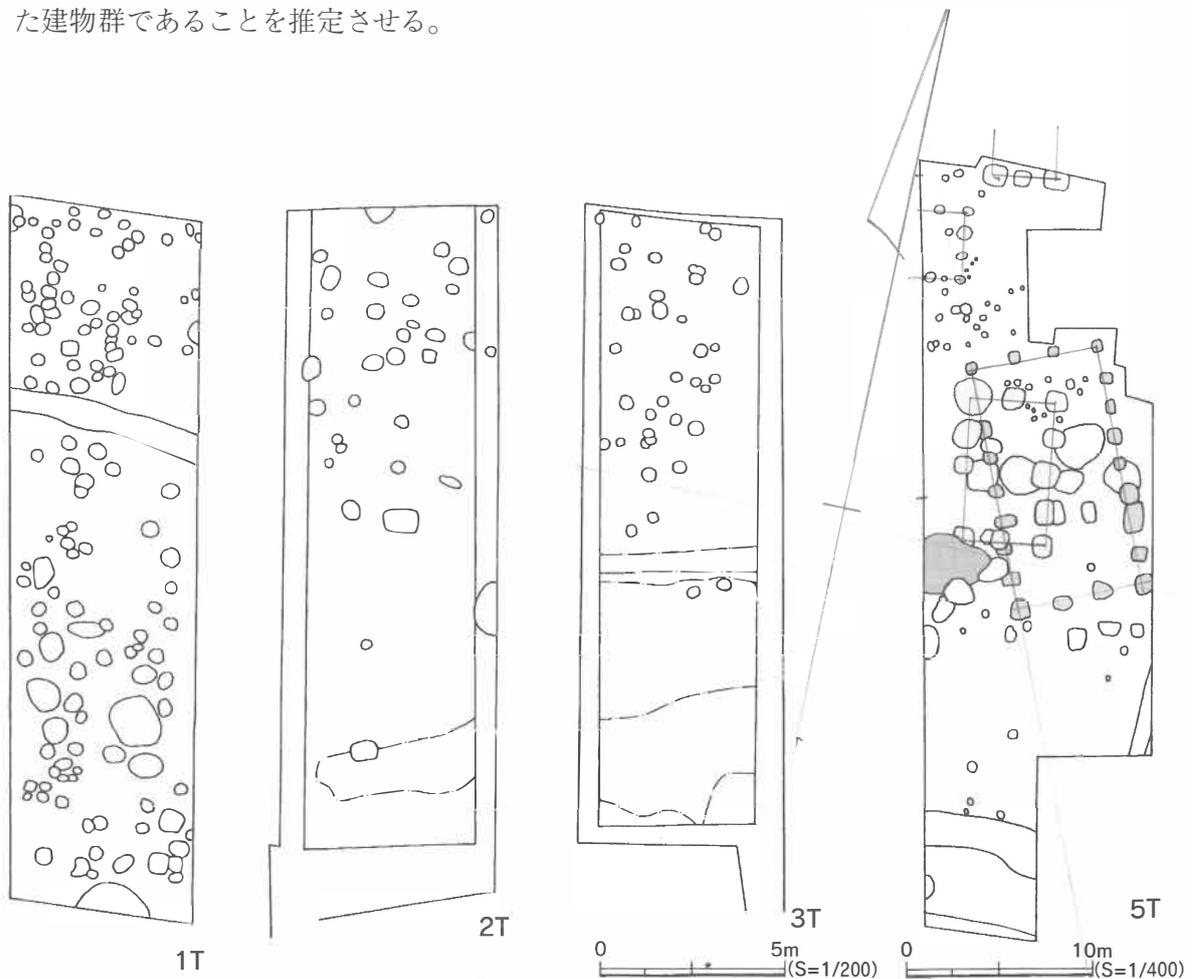


図9 主要トレンチ平面図

掘立柱建物跡は、1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡で建物跡の全体を確認することができた。この2棟の建物跡には重複関係が見られ、1号掘立柱建物跡が古い建物跡であることが確認されている。1号掘立柱建物跡は、南北8間×東西3間の中抜きで、南北に細長い建物跡であり、建物の主軸は真北を向く。2号掘立柱建物跡は、東西2間×南北4間の中抜きで南北棟の建物跡であり、建物の主軸方向は真北方向から約30°ほど東に偏する。3号掘立柱建物跡、4号掘立柱建物跡は調査区の関係により全体を確認することができなかったが、柱穴の配置から建物跡として判断した。2号・3号・4号の3棟の掘立柱建物跡は、建物の主軸方向が同じであることから、同時期に存在していた可能性が考えられる。泉廃寺跡で確認される建物跡としては、①建物の主軸方向が真北方向を向くもの、②建物跡の主軸が真北方向からやや東に偏するもの、③真北方向からやや西に偏するものに分けることができることから、大きく3時期を想定するに至っていたが、明確な重複関係が確認されてなく各建物群の新旧関係は不明であった。今回の成果の一つとしては、①に属する建物群は②に属する建物群よりも古い建物群であることが判明したことである。

また、掘立柱建物跡が確認された5 T周辺からは、花葉文軒丸瓦などの多量の瓦が出土した。これまでの泉廃寺跡の発掘調査において、官衙的な配置をする建物群が確認された地域からは、瓦の出土が非常に少ないことから、当調査区域はこれまでの調査区域のような官衙的な性格をもった建物群とは異なった性格を推定させ、行方郡衙付属寺院の可能性が考えられる。また、出土遺物の中には博と思われる破片が認められることから、この地区には博積基壇をもつ建物跡が存在していた可能性が考えられる。しかし、現在の地形を見ると寺院の伽藍が配置されるほどのスペースに乏しいこと、寺院跡と決定できる遺構及び遺物は確認されなかったことから、寺院跡と決定するには更なる検討が必要である。

遺物は、5 Tの瓦溜を中心に多量の瓦が出土した。瓦としては軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼板・博などが出土した。

1 軒丸瓦

花葉文軒丸瓦・花文軒丸瓦・三蕊弁四葉花文軒丸瓦・細弁蓮華文軒丸瓦・重弁八葉蓮華文軒丸瓦に分けることができる。

1 花葉文軒丸瓦（図10-1～9）

出土量が最も多く、泉廃寺跡における主流の瓦であると考えられる。文様構成としては、明瞭に突出する中房に1+4の蓮子が見られる。中房を中心に葉文が付する長莖がのび、長莖間の隙間を埋めるように花文が表現される。花葉文軒丸瓦は、文様構成及び製作技法から2種類に細分できる。接合技法は印籠つなぎと腰浜C技法による。また、蓮子の形態によって更に細分が可能である。

2 三蕊弁四葉花文軒丸瓦（図11-1～7）

花葉文について出土量が多いのが三蕊弁四葉花文軒丸瓦である。全体が判断できる資料は出土していない。文様構成としては、浮線による中房には1+4の蓮子が表現される。同じく

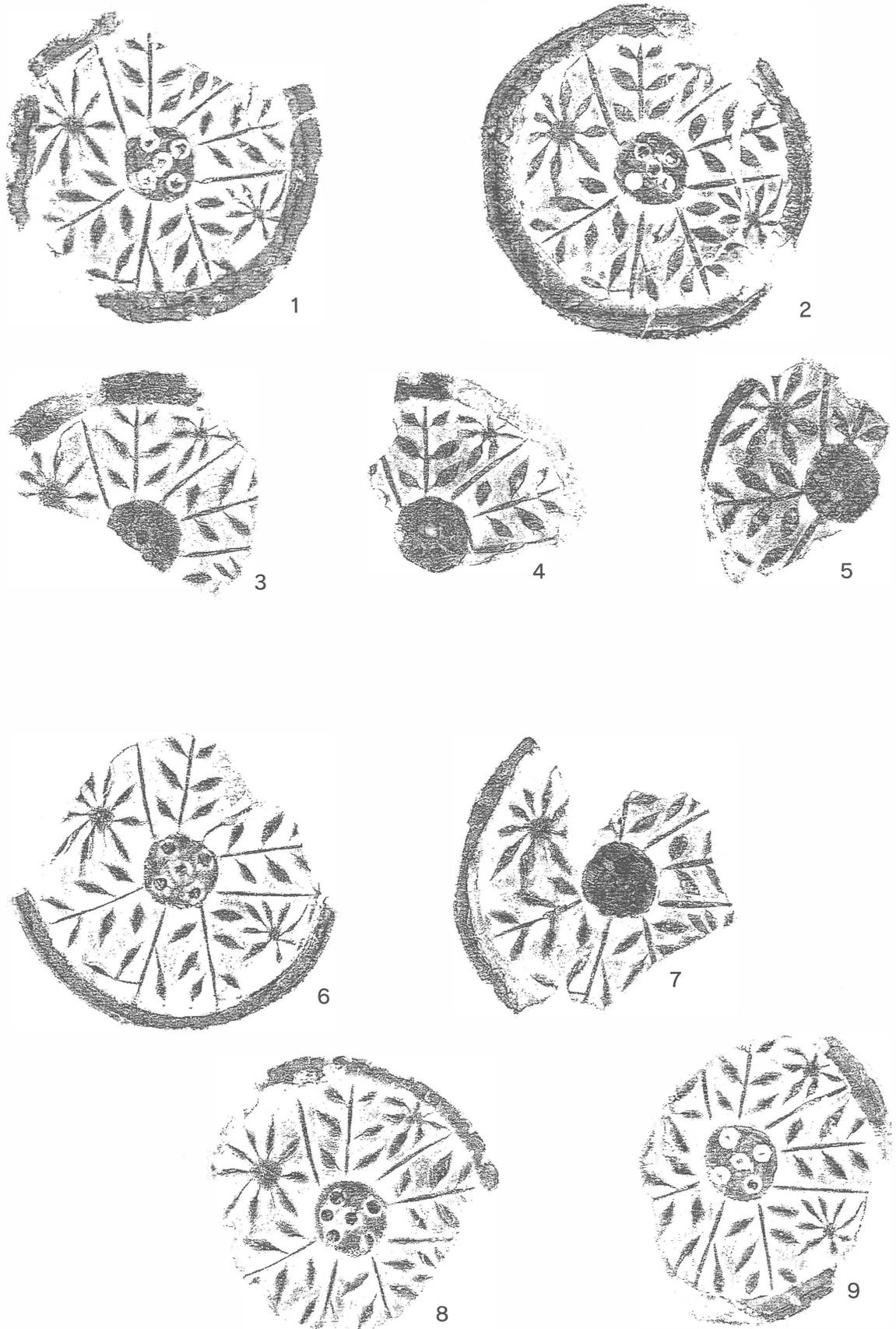
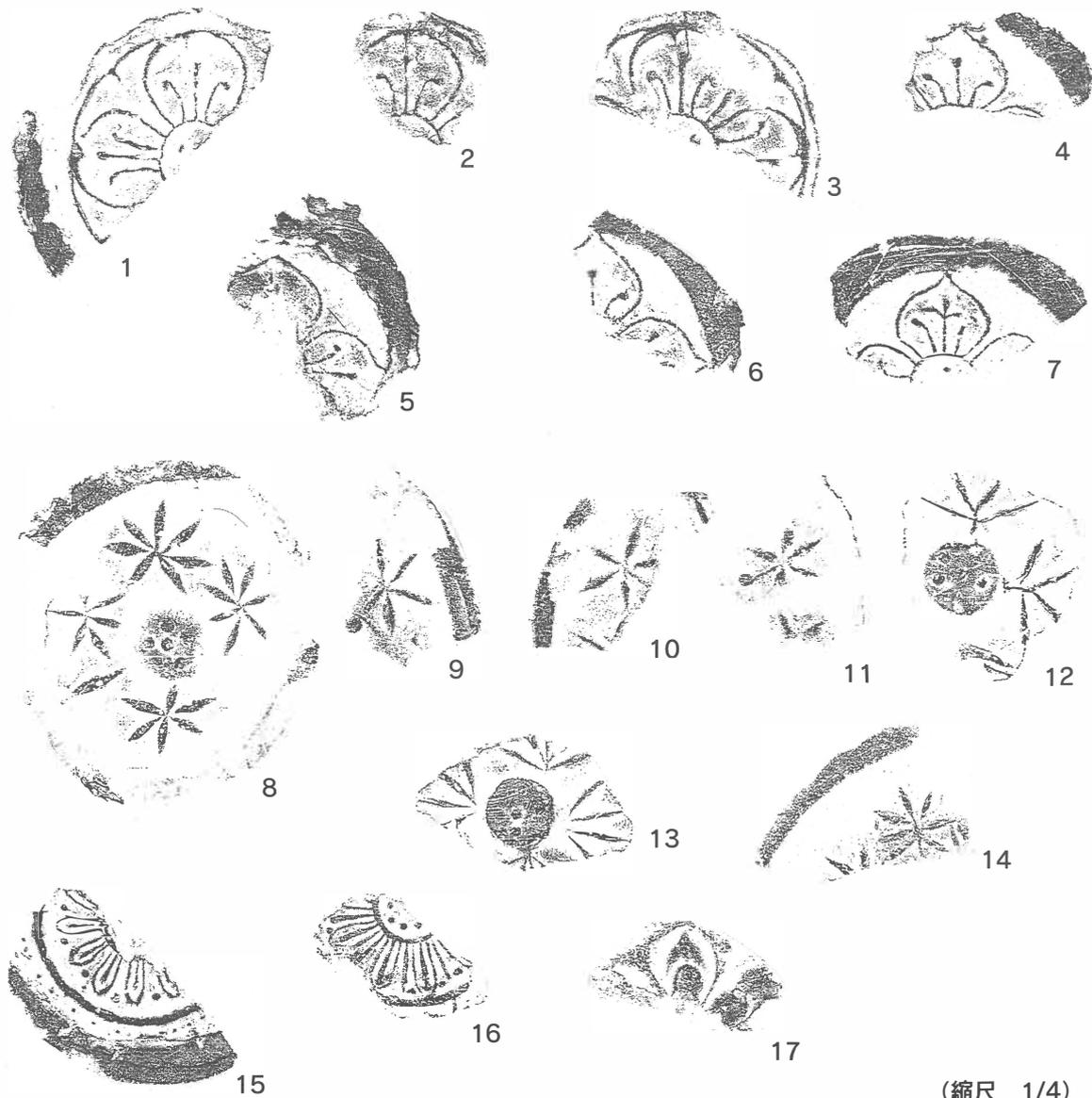


图10 花葉文軒丸瓦拓影

(縮尺 1/4)



(縮尺 1/4)

図11 三蕊弁四葉花文軒丸瓦(1~7)・花文軒丸瓦(8~14)・細弁蓮華文軒丸瓦(15・16)・重弁蓮華文軒丸瓦(17)

浮線による四葉の花文が表現され、花文の内部には三本の弁が表現される。また、四葉花文の先端が尖る「スペード型」のもの、先端が丸い「ハート型」のもの2種類に分類される。瓦は一本作りによって製作されている可能性がある。

3 花文軒丸瓦 (図11-8~14)

花文軒丸瓦は、突出する中房に1+5の蓮子が見られ、瓦当文様は内区に六葉と七葉の花文を4個ほど配する。出土量は少なく、詳細については不明である。瓦当と丸瓦の接合技法は判然としなく、印籠つなぎの可能性が考えられる。破片資料の中には、上記とは異なった文様をもつものも見受けられることから、いくつかバリエーションがある可能性が考えられる。

4 細弁蓮華文軒丸瓦 (図11-15・16)

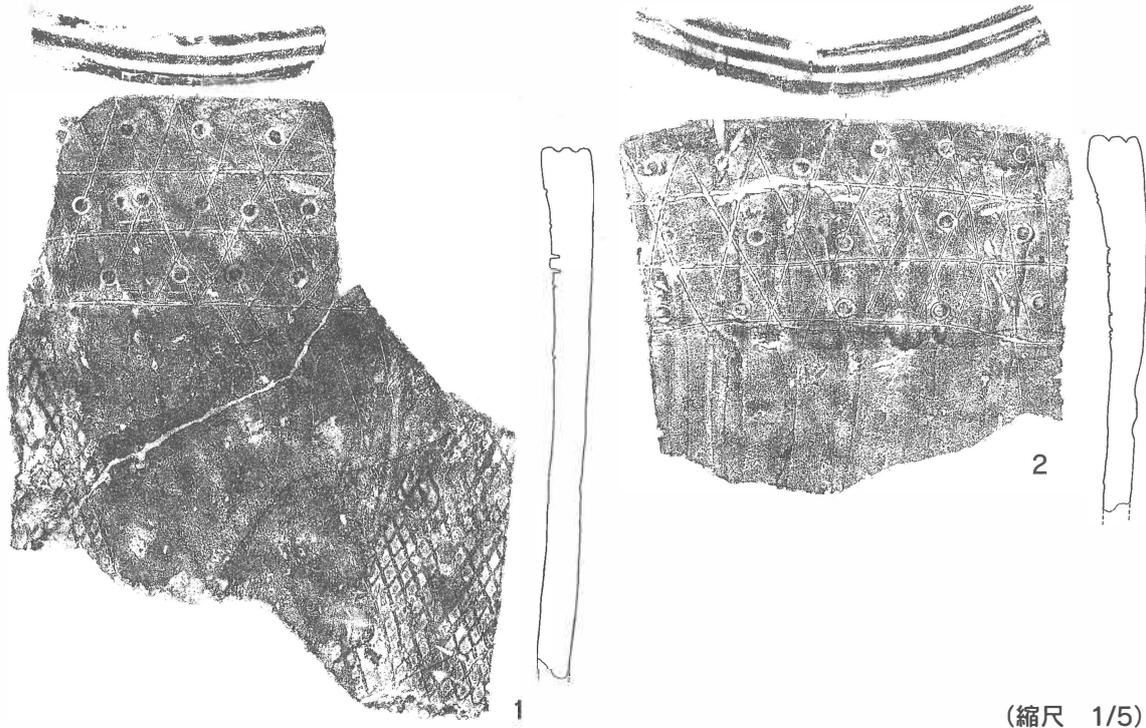


図12 重弧文軒平瓦拓影1

(縮尺 1/5)

細片のため全体を判断できる資料はないが、以前に採集されている資料によると、浮線によって中房が区画され、中房内には1 + 7の蓮子が見られる。このうち、中心蓮子は周縁蓮子と比較すると一回り大きい。内区には十三葉の蓮弁が見られるが、いずれの蓮弁も接しない。この蓮弁の先端間には珠文が見られる。外区内縁には、周縁蓮子よりもさらに小さい珠文がめぐる。瓦当と丸瓦は印籠つなぎによって接合されるものと考えられる。

5 重弁蓮華文軒丸瓦 (図11-17)

細片で全体は判断できない。中房の形態は不明である。蓮弁は八葉で構成されると推定され、盛上りが強い。子葉は丸みを帯び、弁の中心線は不明瞭である。

2 軒平瓦

軒平瓦としては、無文軒平瓦・重弧文軒平瓦・釣針文軒平瓦・木葉文軒平瓦などが出土した。

1 無文軒平瓦 (図15-2)

無文軒平瓦の出土量は少ない。明瞭な顎部を持ち凸面にはタタキ・凹面には布目が残る。瓦当面はケズリにより整えられる。凸面のタタキは顎部までいたり、また顎部付近には赤色塗料が付着しているものが見られる。

2 重弧文軒平瓦 (図12-1・2、図13-1~5)

最も出土量が多く、種類も豊富である。明瞭な顎部はない。瓦当の文様としては、二重弧文・同三重弧文・同四重弧文に分けられる。これらの軒平瓦の凸面広端部には、ヘラ書きによる三角文と竹管状工具による円文が施される。三角文は斜線と横線の組み合わせに

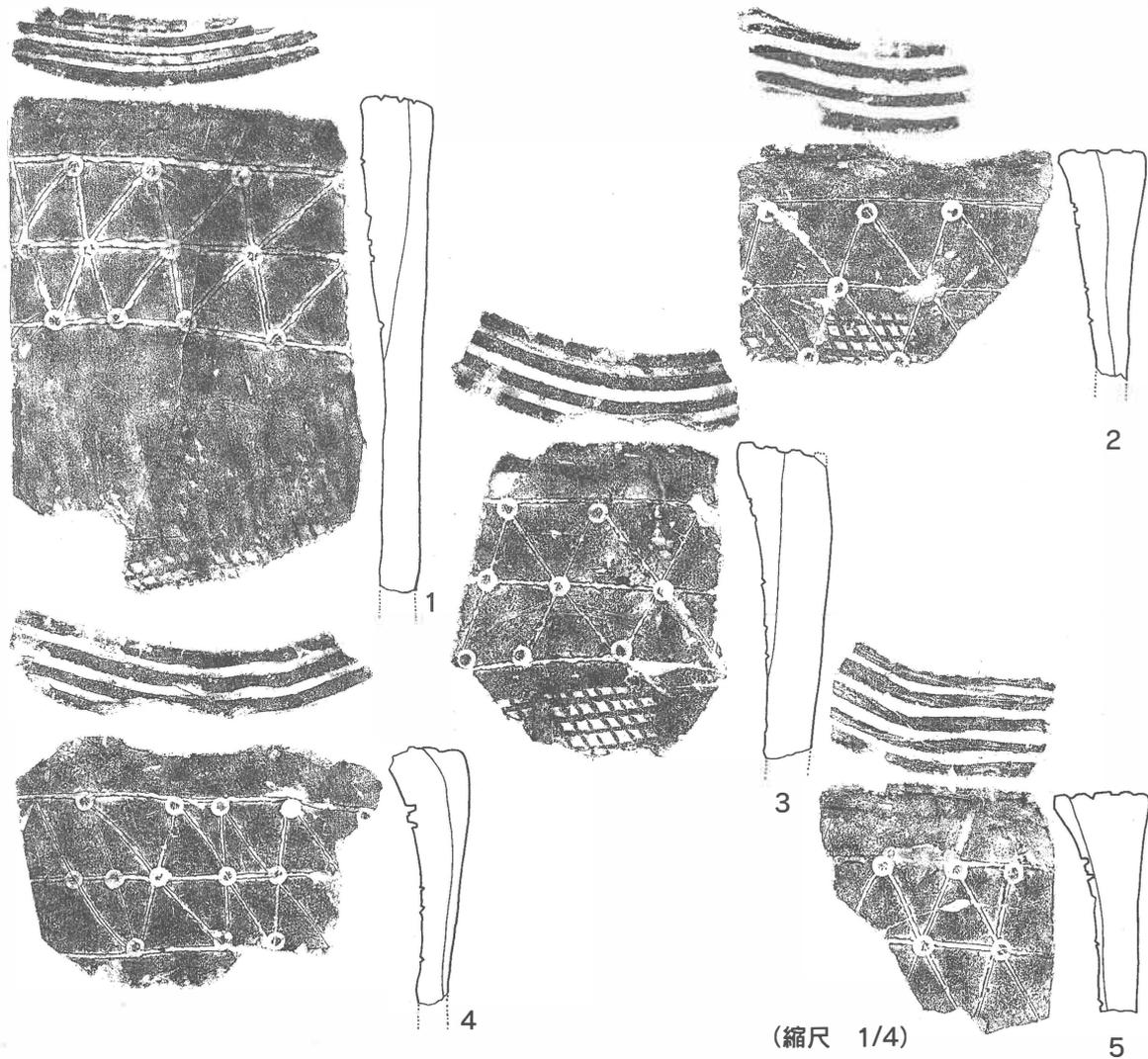


図13 重弧文軒平瓦拓影2

よって描かれ、上下二列のものと三列のものがある。三角文の下には斜格子のタタキが残るが、所々にナデが施されタタキの痕跡が消されてしまうものがある。また、最下段三角文の付近には赤色塗料が付着しているものも見られる。凹面はナデによって調整され、所々に布目が観察される。

3 釣針文軒平瓦（図14-1～9）

釣針文軒平瓦は、重弧文軒平瓦について種類が豊富である。文様は瓦当内区に上下二列の釣針に似た文様が配され、浮線によって外区と区別される。外区内には上下一列ずつの珠文がめぐるが外区の側辺までは至らない。瓦当文様の釣針文の向きや珠文の配置によって四種類に細分される。凸面は、ヘラ状工具で一筆書きによる三角文と竹管状工具による円文を組み合わせるものと、無文のものが確認され、いずれも有段である。重弧文軒平瓦の三角文とは異なった手法である。凹面は所々に布目が残るものの、全体的にはナデによって整えられる。双葉町郡山五番遺跡からも、同範と思われる釣針文軒平瓦が出土している。

4 木葉文軒平瓦（図15-1）

木葉文軒平瓦は、瓦当の全面に1本の長莖と長莖に付する葉文が施される。凸面には重弧文軒平瓦と同種のヘラ書き三角文を施文し、竹管による円文が施される。凹面は布目が残るが、基本的には布目をナデ消す。同様の文様をもつ軒平瓦は双葉町郡山五番遺跡で出土している。出土量は少なく、これ以上の検討はできない。

3 鬼板 (図18-3~5)

鬼板としたものは、扁平で板状のものである。上部は欠損しており、全体の形状は判断できないが、下部は半円形の削り込みが認められることから鬼板として分類した。また、表現される文様が軒丸瓦の葉文とは異質なものが鬼板とした。文様は相馬市史1. 通史編に掲載されている泉廢寺跡出土の鬼板の復元図を参考にすると、半円形の削り込みの両端から2本の長莖が上方に向かって伸びる。長莖は上方において交叉し下方に垂れ下がる。この長莖には、楓のような大きな葉文がいくつか付するものと考えられる。鬼板の種類としては灰褐色のものと、褐色のものが確認される。表の文様は筈によるものであり、裏面はナデによって整えられる。

4 埴 (図18-1・2)

埴は、厚さ3~5cmほどで、平瓦のような湾曲はみられない。調整としては、両面ともにタタキによって調整されるものと、片面はタタキで調整され、反対側はナデによって調整されるもの、両面をケズリによって調整されるものの三種類に分類できる。

5 平瓦 (図16-3)

平瓦は、桶巻き技法によるものである。凸面は斜格子・格子・縄タタキが施され、凹面は明瞭なナデによって調整されるものと、模骨痕と布目が残るものがある。また平瓦の側端部は、二面に面取りを行うもの、三面に面取りを行うもの、分割の際の面を残すものの三種類が見られる。

6 丸瓦 (図17-1~6)

丸瓦は、無段(行基)と有段(玉縁)が確認され、また円筒状丸瓦を二分割するものと、三分割するものに分類される。このうち三分割するものが花葉文軒丸瓦に使用されるものと考えられる。出土した丸瓦のうち、無段で三分割するものは出土量の大半をしめる。調整としては、外面は明瞭なケズリによって調整され、内面には明瞭な布目が残る。また、丸瓦の側端部を二面及び三面に面取りするものも見られる。布目は確認できない。また、三分割するもので丸瓦狭端部をケズリで再調整することによって、鋭角にするものも見られる。

泉廢寺跡周辺から出土する瓦群については、その特異な文様からおおむね平安時代の年代が推定されていたが、陸奥国および日本国内においても類例が求められない文様であることから、年代および系譜については、いまだに決定をみてはいない。また、これまでの採集されている瓦群については、そのほとんどが表面採集によって得られた資料であり、発掘調査により確認されたものは今回がはじめてである。今回の出土遺物の大半は、2号掘立柱建物跡と重複関係のある瓦溜から出土した。瓦溜は、各建物群よりも新しいことが確認されている。

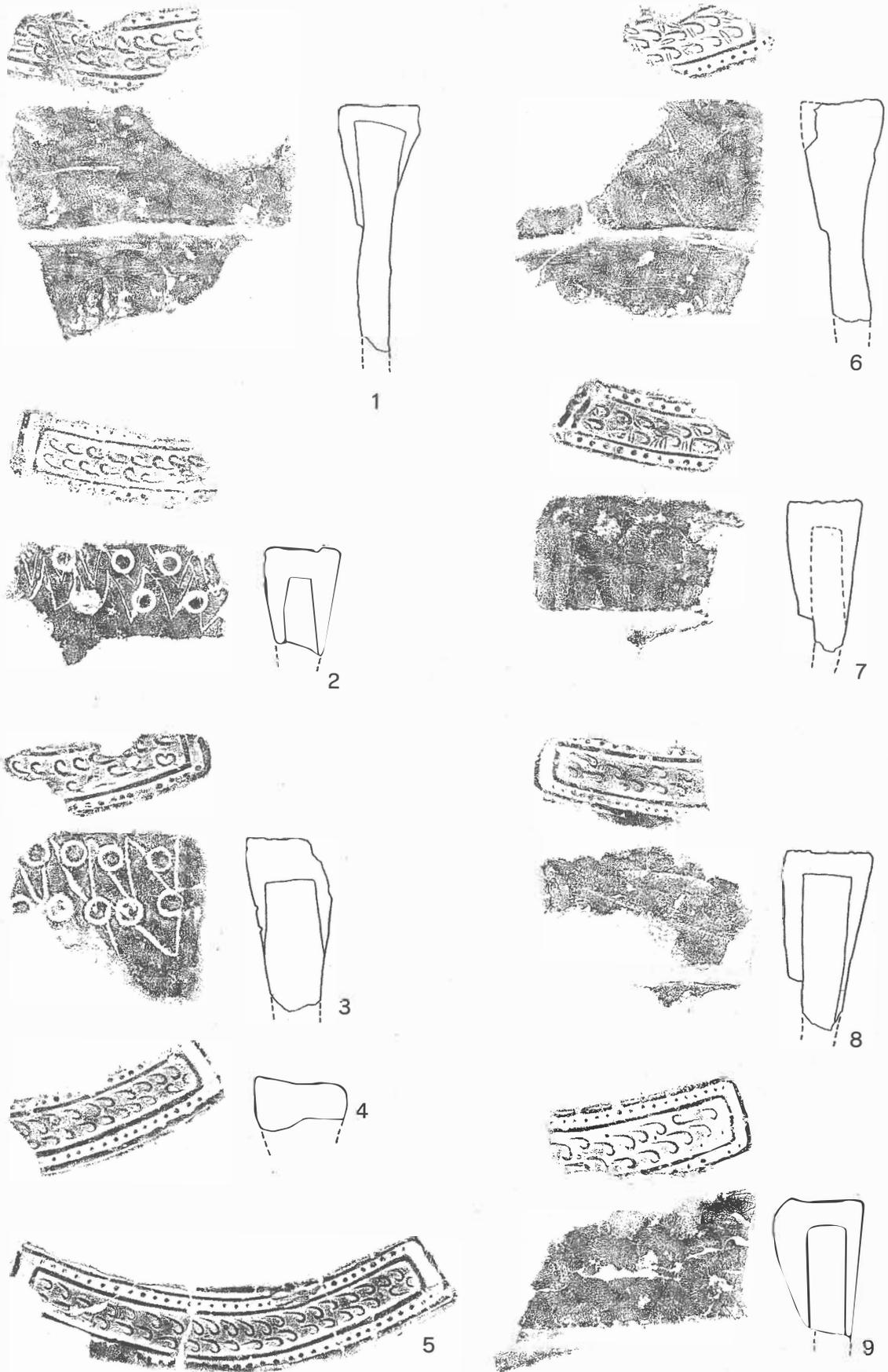


圖14 釣針文軒平瓦拓影

(縮尺 1/4)

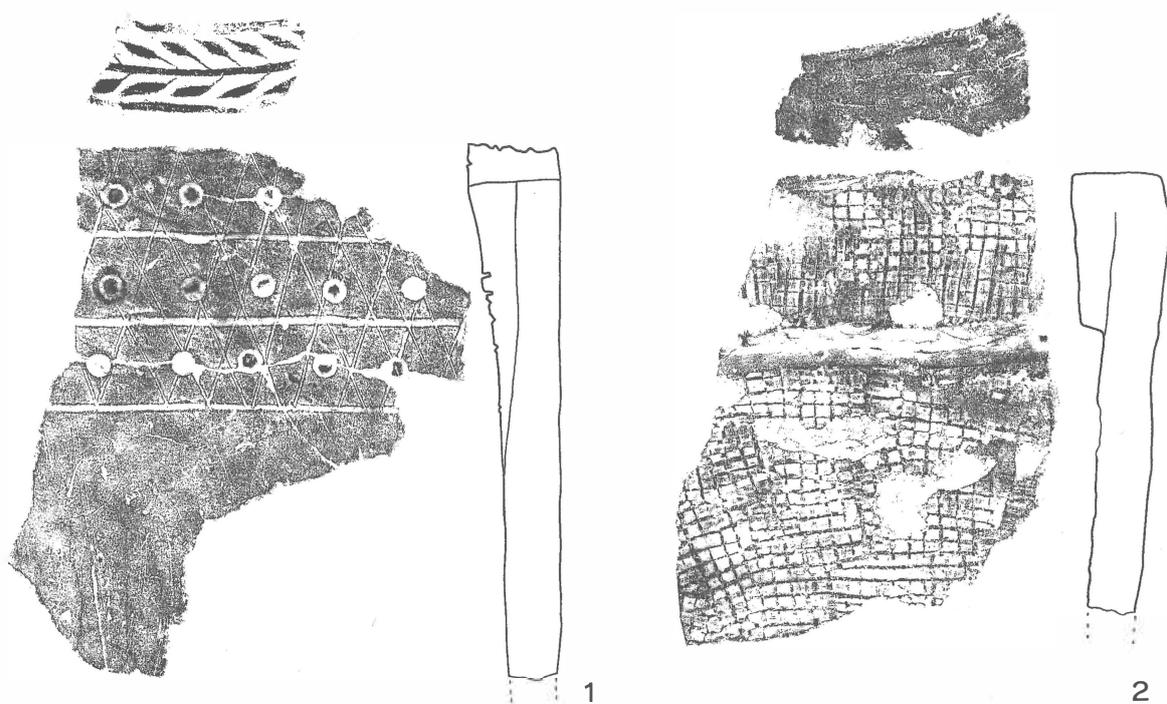
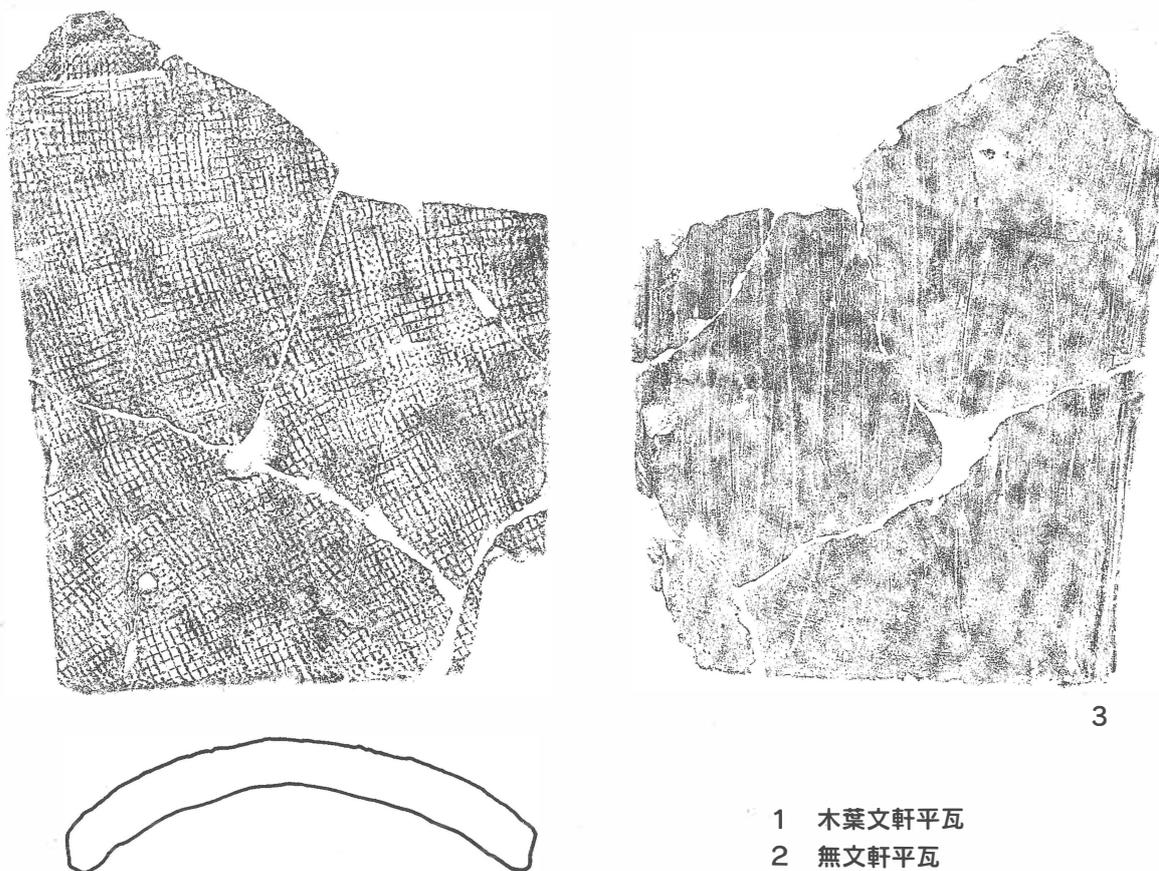


图15 木葉文軒平瓦・無文軒平瓦拓影

(縮尺 1/4)



- 1 木葉文軒平瓦
- 2 無文軒平瓦
- 3 平瓦

图16 平瓦拓影

(縮尺 1/5)

瓦溜からは花葉文軒丸瓦・三蕊弁四葉花文軒丸瓦・釣針文軒平瓦・重弧文軒平瓦・博など多種多様の瓦が一括して出土している。このような出土状況であることから、軒丸瓦と軒平瓦のセット関係については明確ではないが、現在までの整理の段階では、軒丸瓦では花葉文軒丸瓦の出土が最も多いことから、泉麿寺跡における主流の瓦であると考えている。軒平瓦の出土量では、釣針文軒平瓦と重弧文軒平瓦が多いことから、花葉文軒丸瓦とセット関係にある軒平瓦は釣針文軒平瓦と重弧文軒平瓦の二種類と想定しておくが、引き続き詳細な検討を行い、各瓦のセット関係を明確にしなければならないと考える。軒平瓦の中には凸面の広端部付近の顎部もしくは三角文付近に、朱が付着しているものが見られる。おそらく、瓦をのせた柱部材の朱が付着したものと考えられ、この地区には朱色に染められた柱の建物跡が存在していた可能性が考えられる。今回の調査で出土した遺物の中には、ロクロ挽き重弧文軒平瓦のように、奈良時代までさかのぼる可能性のある遺物が出土していることを考えると、泉麿寺跡はこれまで言われてきた平安時代よりも遡り、奈良時代には成立していた可能性が考えられる。今後、当調査区域の性格や瓦群の年代について、詳細な検討が必要である。また、双葉町郡山五番遺跡から出土する瓦群は、泉麿寺跡から出土する瓦群と非常に類似しており、中には同範の可能性もある瓦も見受けられる。今後、両者の遺跡及び瓦群の性格について詳しい検討が必要である。

以上が当調査区域の成果及び所見である。このように、当調査区域は多量の瓦が出土することや行方郡衙付属寺院跡の可能性が考えられるなど、非常に重要な地区である。当該地の開発に際しては、盛土などの工法対応によって保存されることが望ましい。

参考文献（年代順）

- 1965 内藤政恒 「原町市周辺の古瓦の特色と性格」『腰浜麿寺』福島市教育委員会
- 1984 進藤秋輝他 「第7章 1 瓦」『多賀城跡 政庁跡本文編』宮城県教育委員会
・宮城県多賀城跡調査研究所
- 1984 渡辺一雄他 「第二章 遺跡概説」『双葉町史』双葉町
- 1984 辻 秀人 「第六章 第二節 1 瓦」『関和久遺跡』福島県教育委員会
- 1987 玉川一郎 「泉麿寺跡出土瓦」『原町市の文化財』原町市教育委員会
- 1988 辻 秀人 『陸奥の古瓦』福島県立博物館
- 1994 辻 秀人 「第七章 第二節 1 瓦」『関和久上町遺跡』福島県教育委員会
- 1997 堀 耕平 「泉麿寺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書1』原町市教育委員会
- 1997 堀 耕平 「泉麿寺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書2』原町市教育委員会
- 1998 堀 耕平 「泉麿寺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書3』原町市教育委員会

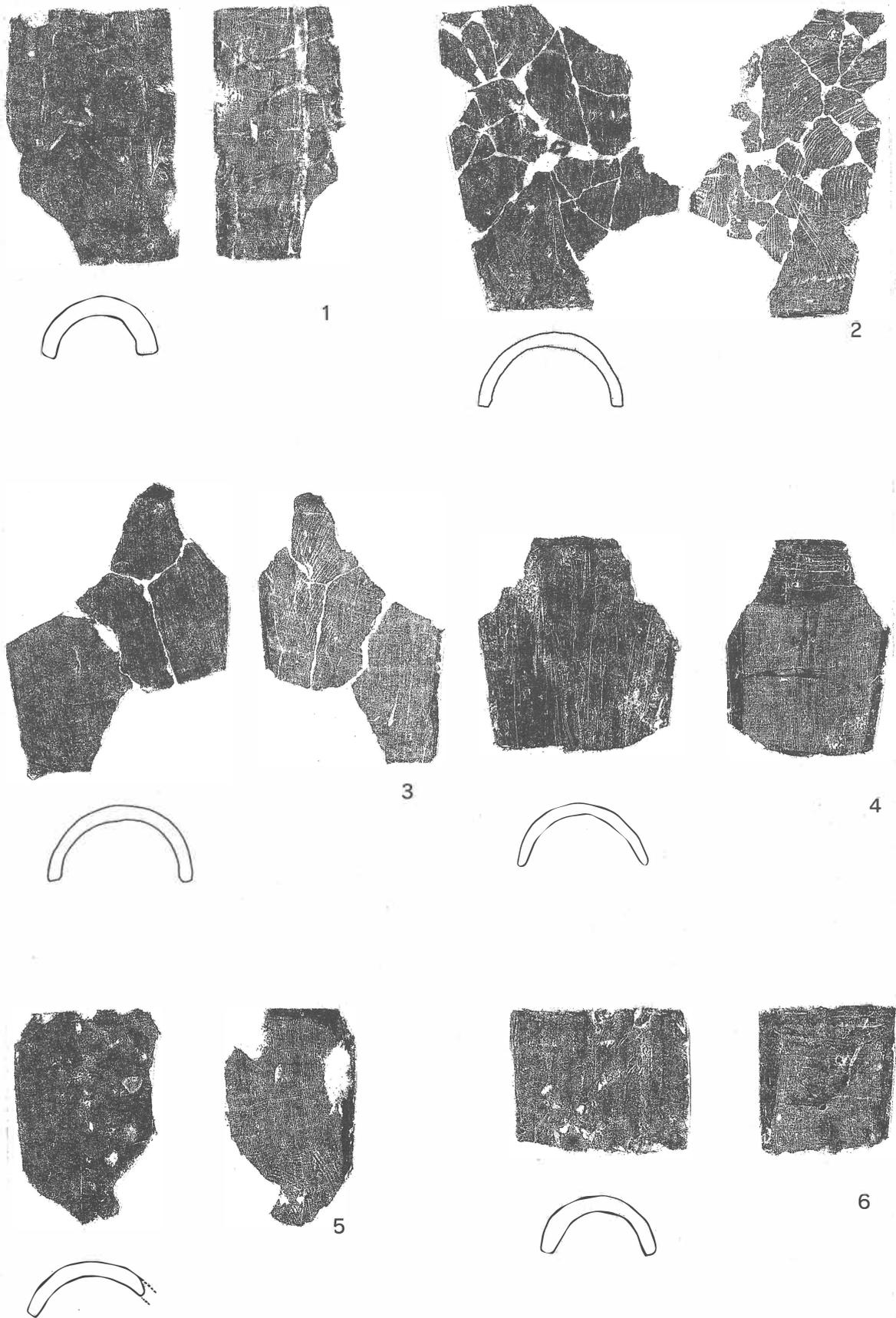


図17 丸瓦拓影

(縮尺 1/8)

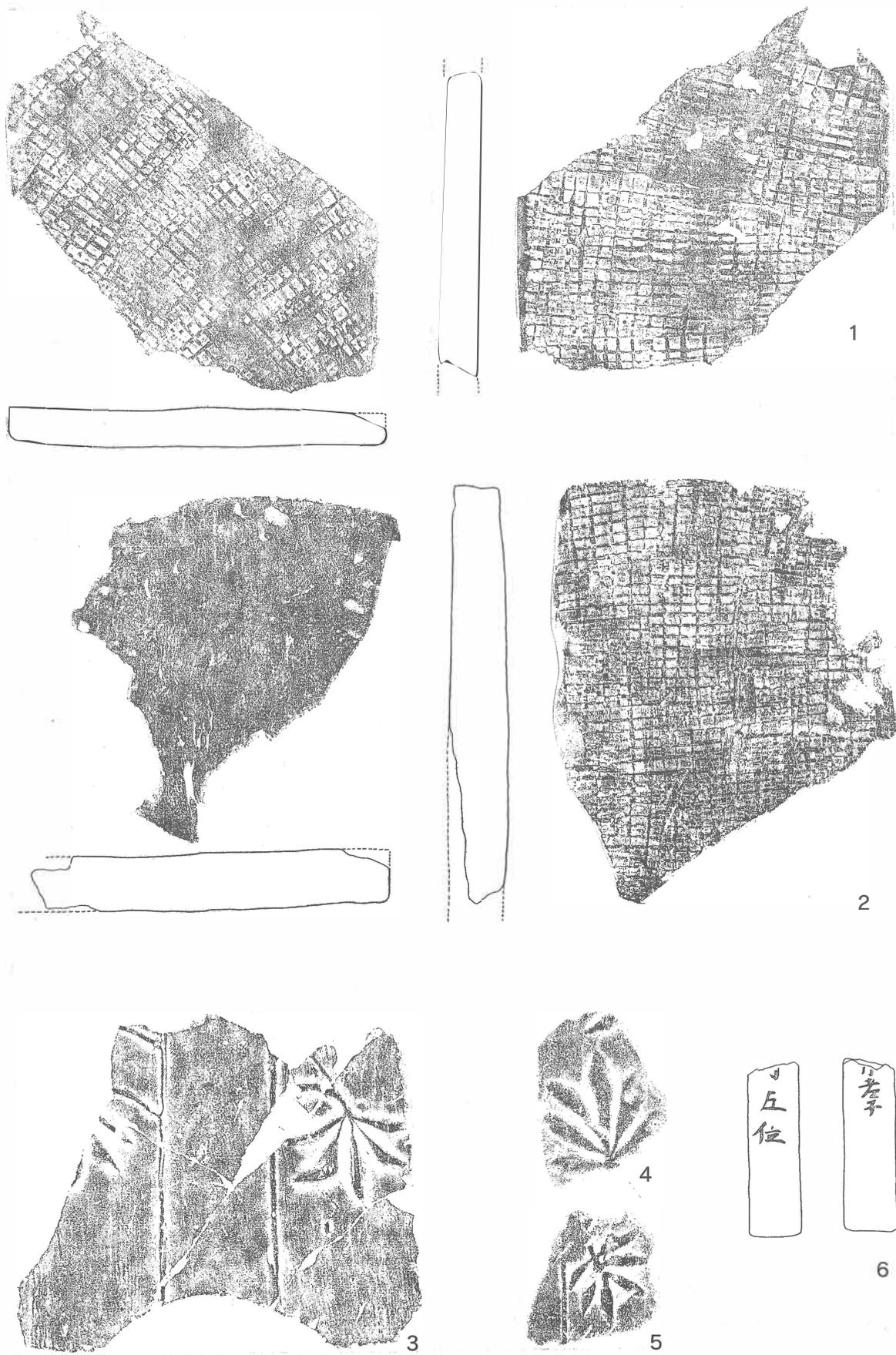


图18 埴(1·2)·鬼瓦(3~5)拓影·木簡

(縮尺 1/4)



図 10-1

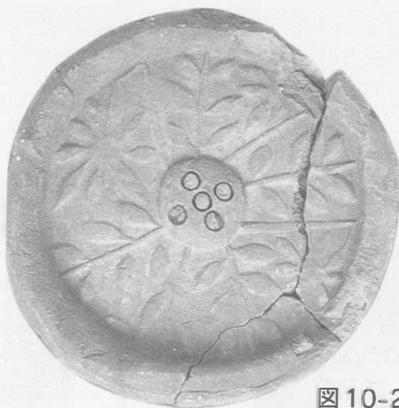


図 10-2



図 10-3



図 10-4



図 10-5



図 10-7



図 10-6



図 10-8

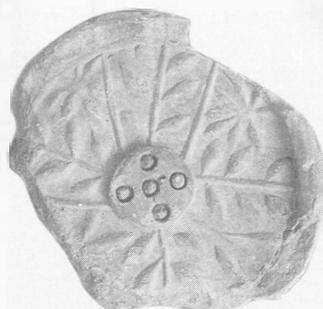


図 10-9



図 11-8



図 11-1

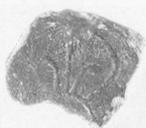


図 11-2

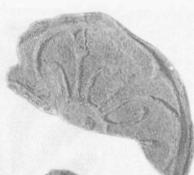


図 11-3



図 11-4



図 11-5



図 11-6



図 11-7



図 11-9

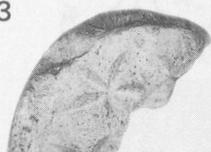


図 11-10



図 11-11



図 11-12



図 11-13



図 11-14



図 11-15



図 11-16



図 11-17

写真1 軒丸瓦

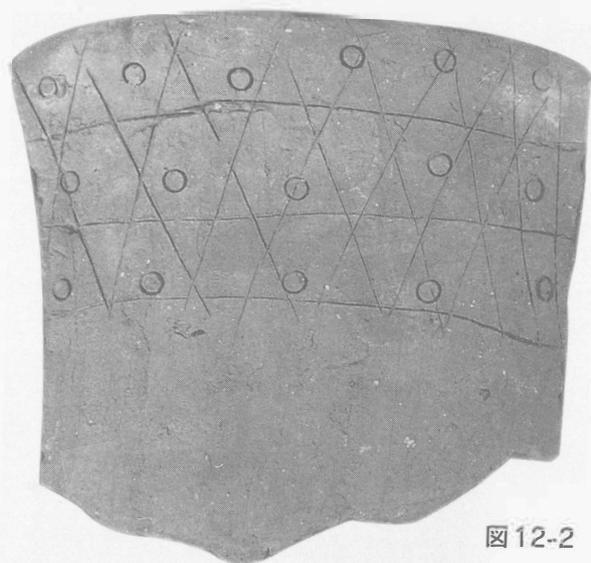


图12-2



图12-1

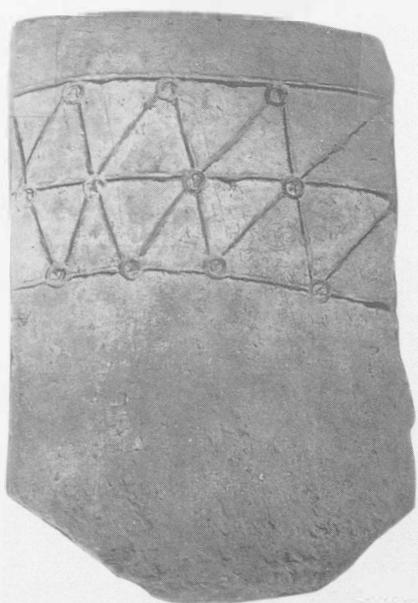


图13-1

写真2 重弧文軒平瓦

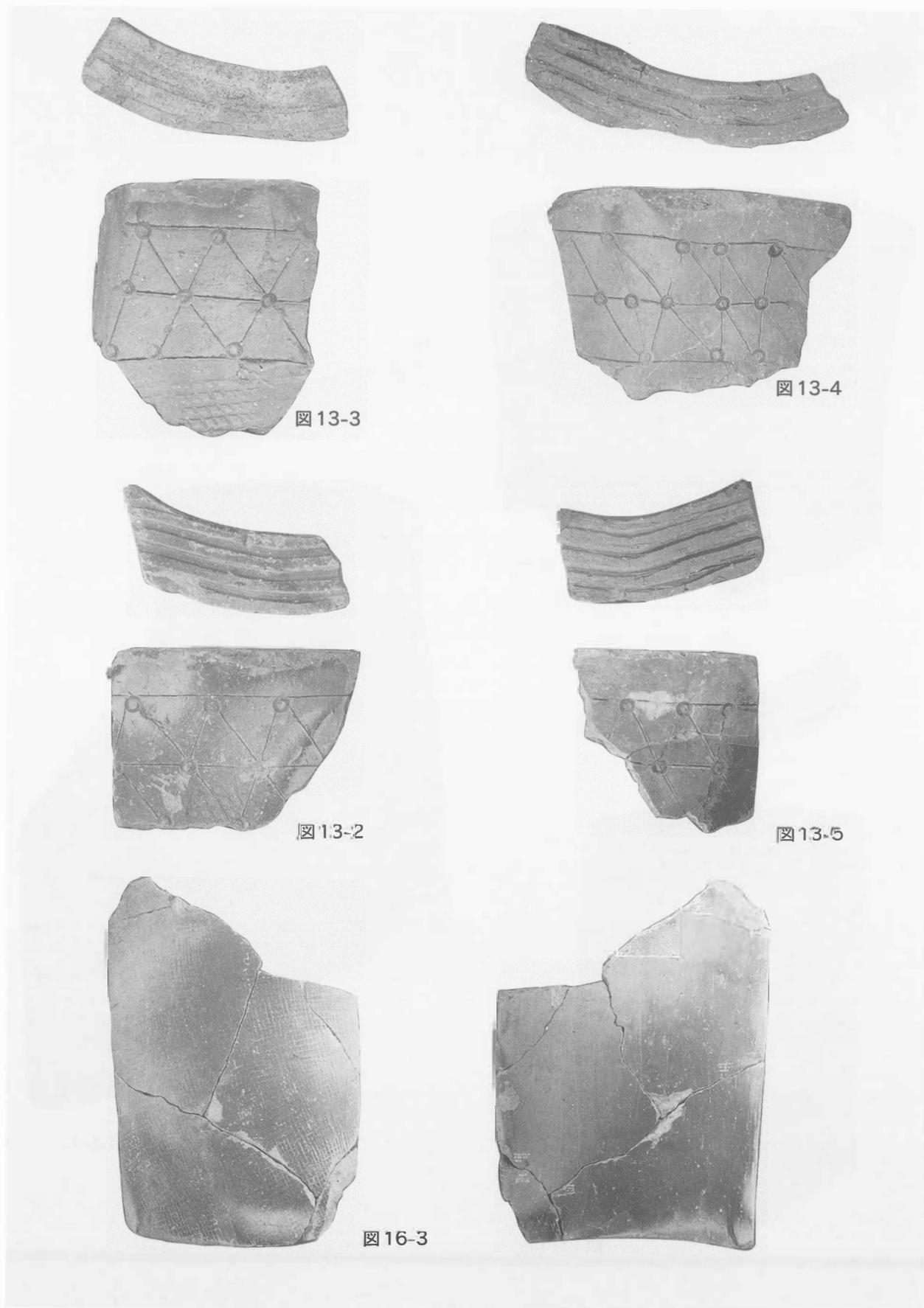


写真3 重弧文軒平瓦・平瓦

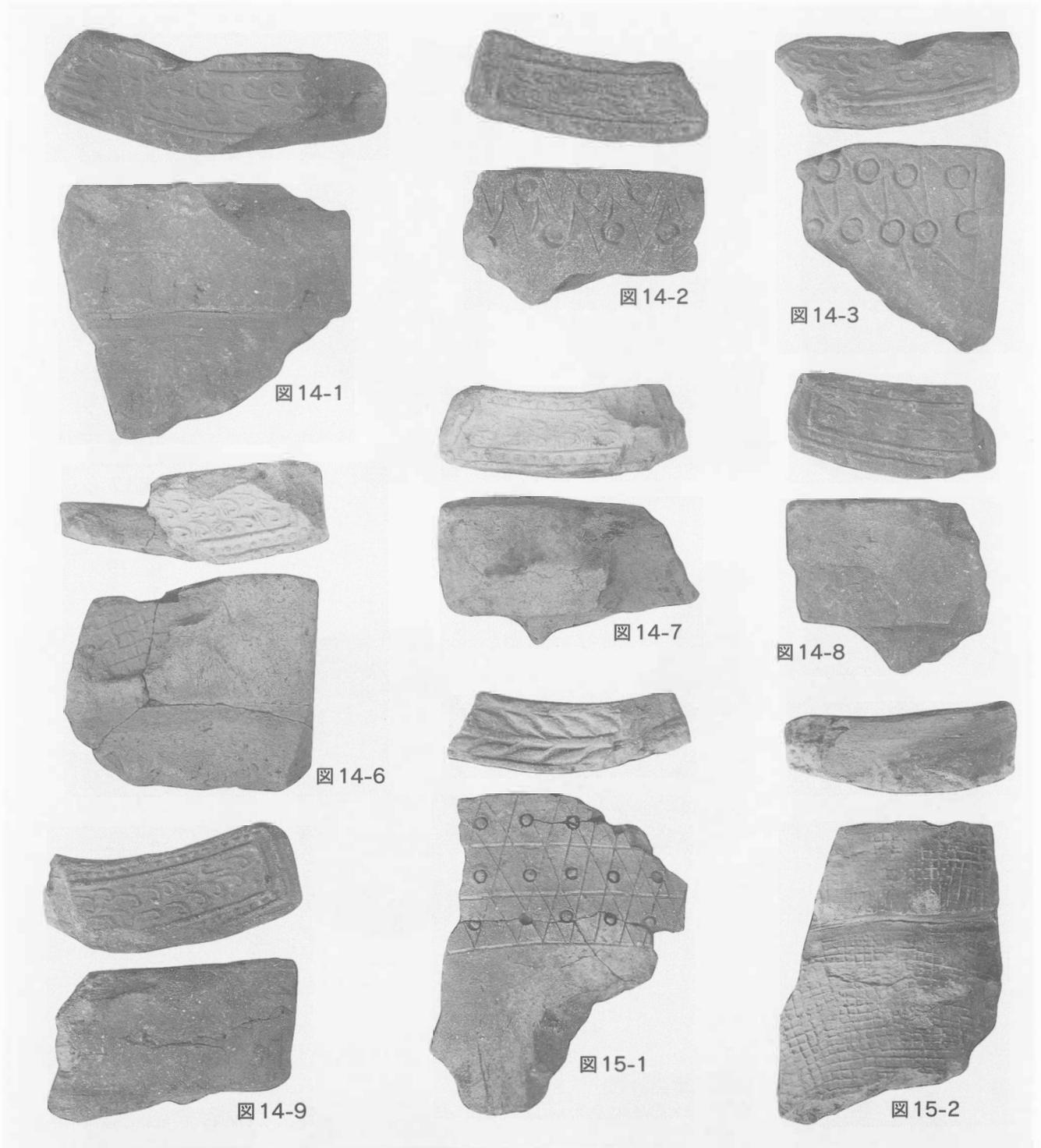


写真4 軒平瓦

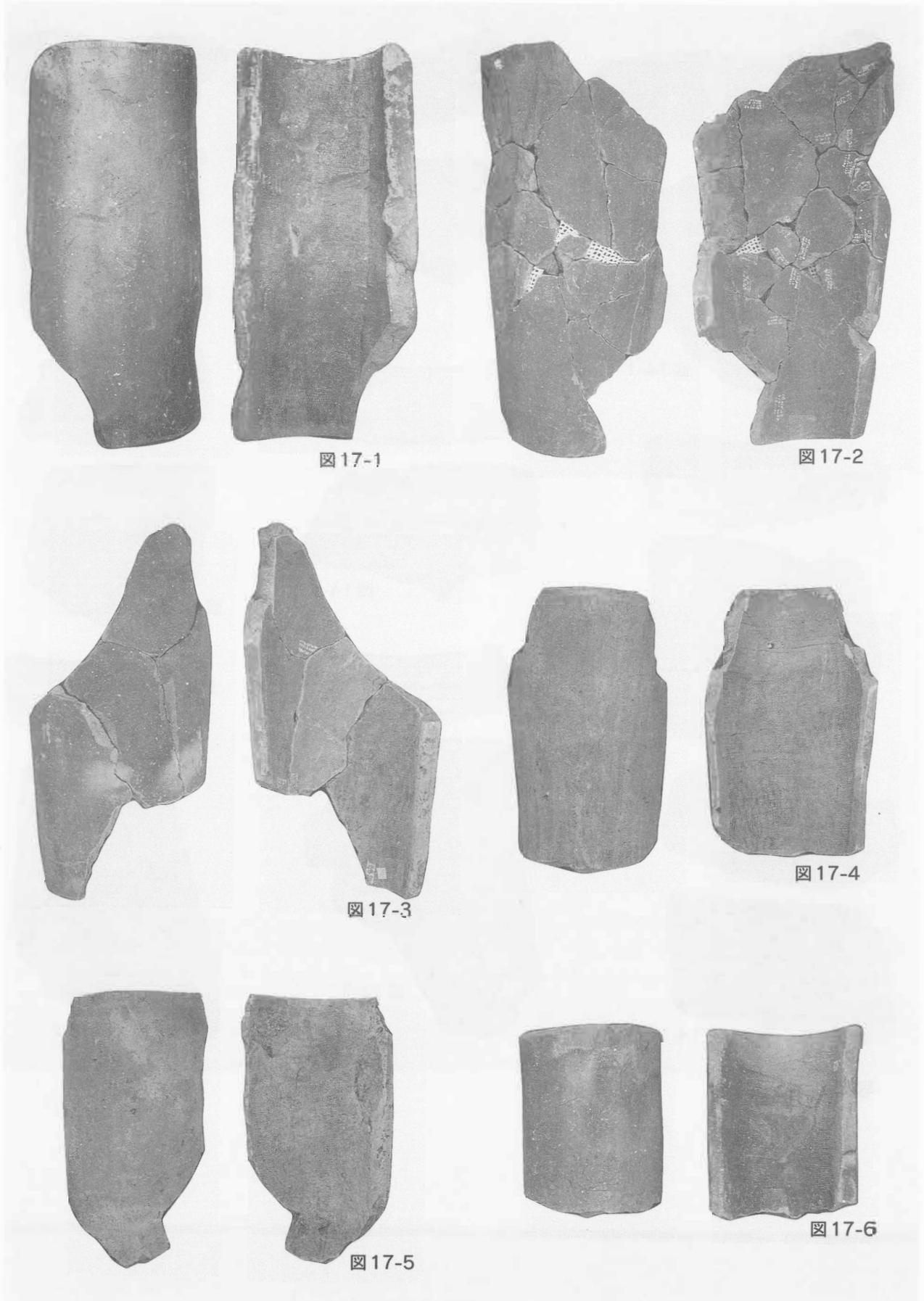


写真5 丸瓦

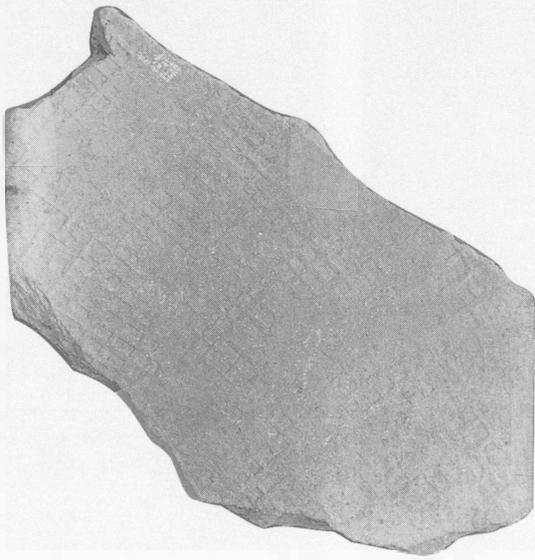


图18-1

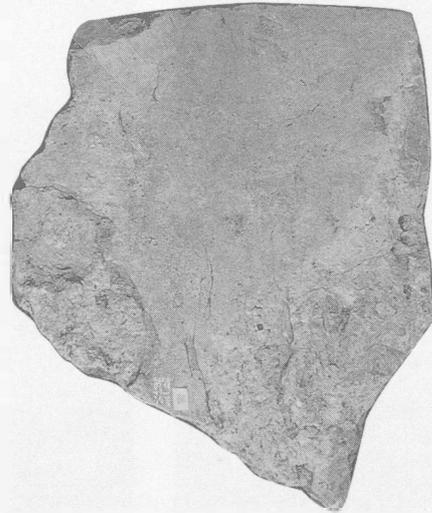


图18-2

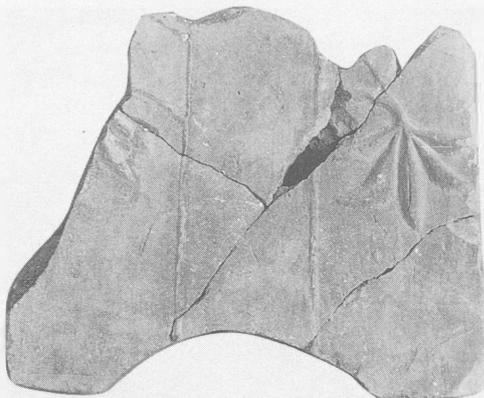


图18-3



图18-4

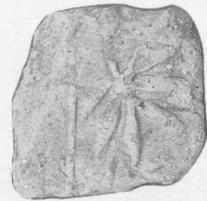


图18-5

写真6 博・鬼板



写真7 1T、遺構検出状況(N→)



写真8 2T、中世整地層(N→)



写真9 3T、中世整地層(N→)



写真10 5T、遺構検出状況(N→)



写真11 6T、1号掘立柱建物跡(N→)



写真12 5T、瓦出土状況(S→)



写真13 5T、1号瓦溜跡(N→)



写真14 作業風景

第4節 前屋敷遺跡（第3次調査）（遺跡番号20600106）

所在地 原町市上渋佐字北谷地21、23－1、70
 調査期間 平成10年7月1日から7月10日まで
 対象面積 2,860 m²
 調査面積 128 m²（試掘率4.5％）
 事業内容 民間の宅地開発に係る保存協議の資料を得るための試掘調査
 調査担当 鈴木文雄

遺跡概要

遺跡は、原ノ町駅から東に2.8kmの、新田川によって形成された河岸段丘の縁辺に位置する。標高は約7m。現況は宅地跡・山林である。

遺跡からは縄文時代前期・古墳時代前期・奈良～平安時代の遺物が出土することが知られている周知の遺跡である（調査報告歴：原町市教育委員会「原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ」1991。同「前屋敷遺跡第2次調査」1997）。

調査概要

今回の調査箇所は東西約120m・南北約40mの細長い調査区で、河岸段丘平坦面（西側）から緩斜面部（東側）に幅2m長さ10mのトレンチを基本として設定した。基本層序はⅠ：黒褐色土（表土）（30～60cm）、Ⅱa：褐色土（約20cm）、Ⅱb：灰白色砂質土（1～30cm）、Ⅱc：黒色粘質土〔20～30cm、縄文時代前期遺物（大木1式）包含層〕、Ⅲ：黒褐色粘質土〔50cm以上、縄文時代前期遺物（大木1式）包含層、中位で集石を検出〕であった。

調査成果

遺構 縄文時代前期集石4基
 遺物 縄文時代前期土器（大木1式）3箱
 縄文時代前期石皿・磨石各1
 古墳時代前期土師器（塩釜式）少量
 弥生時代砥石・石器未製品各1
 平安時代土師器・須恵器少量

所見

1T～3Tを設定した調査区の西半分では縄文時代前期（大木1式）の遺物が多く出土するが、調査区の東半分では遺物はほとんど出土しない。遺構（集石）は西側では3基、東側では1基検出した。今回の調査区は縄文時代前期の集落跡の東端で、集落の中心は今回の調査区の西側にあると考えられる。また、西200mの地点で過去に検出されている古墳時代中期及び平安時代の遺構は発見されず、この時代の遺物も少量であった。

開発にあたっては約1mの盛土を行い、浄化槽の設置に伴って深く掘削する箇所は、工事に際し立会いを要する。

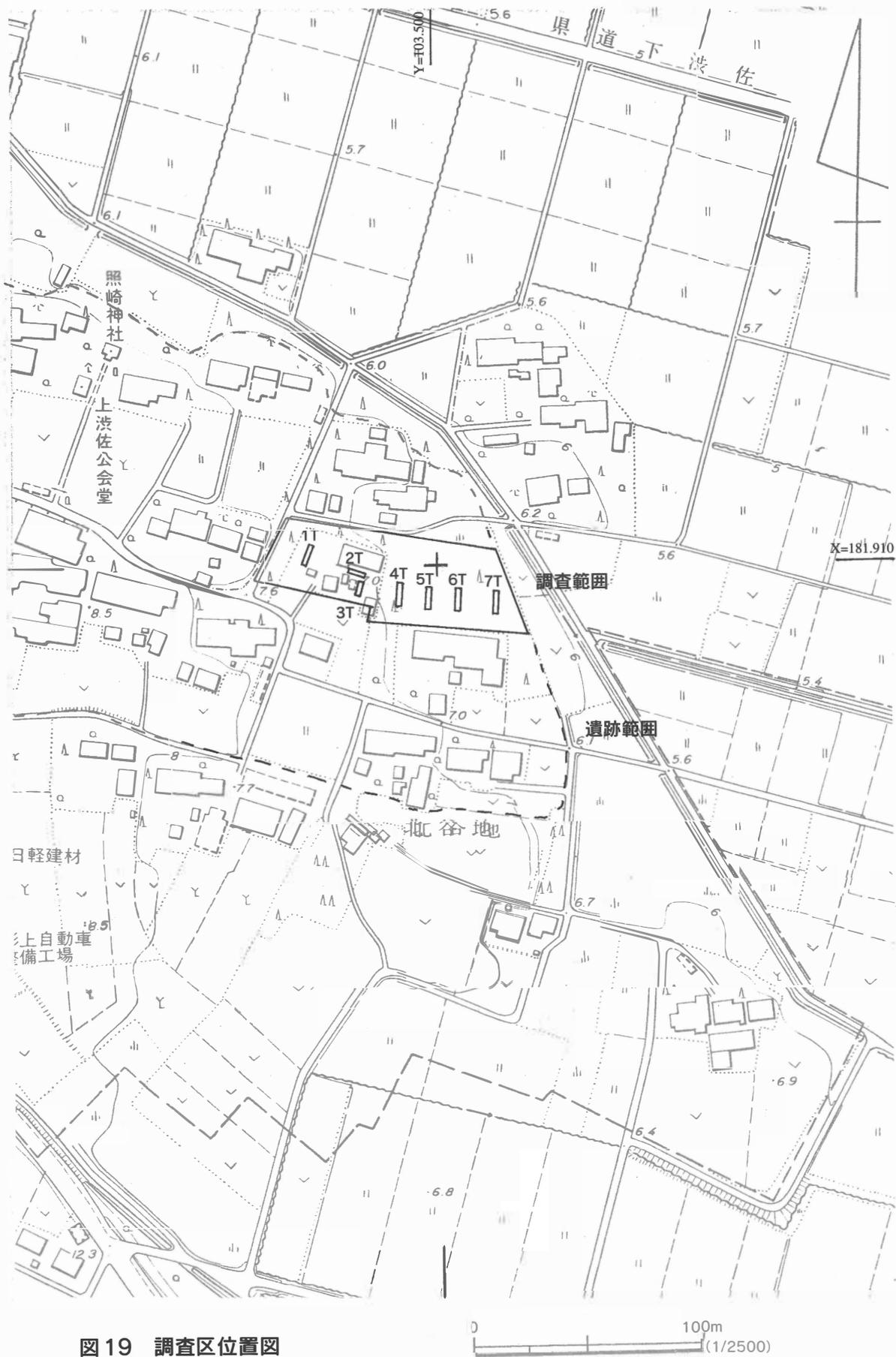


図19 調査区位置図

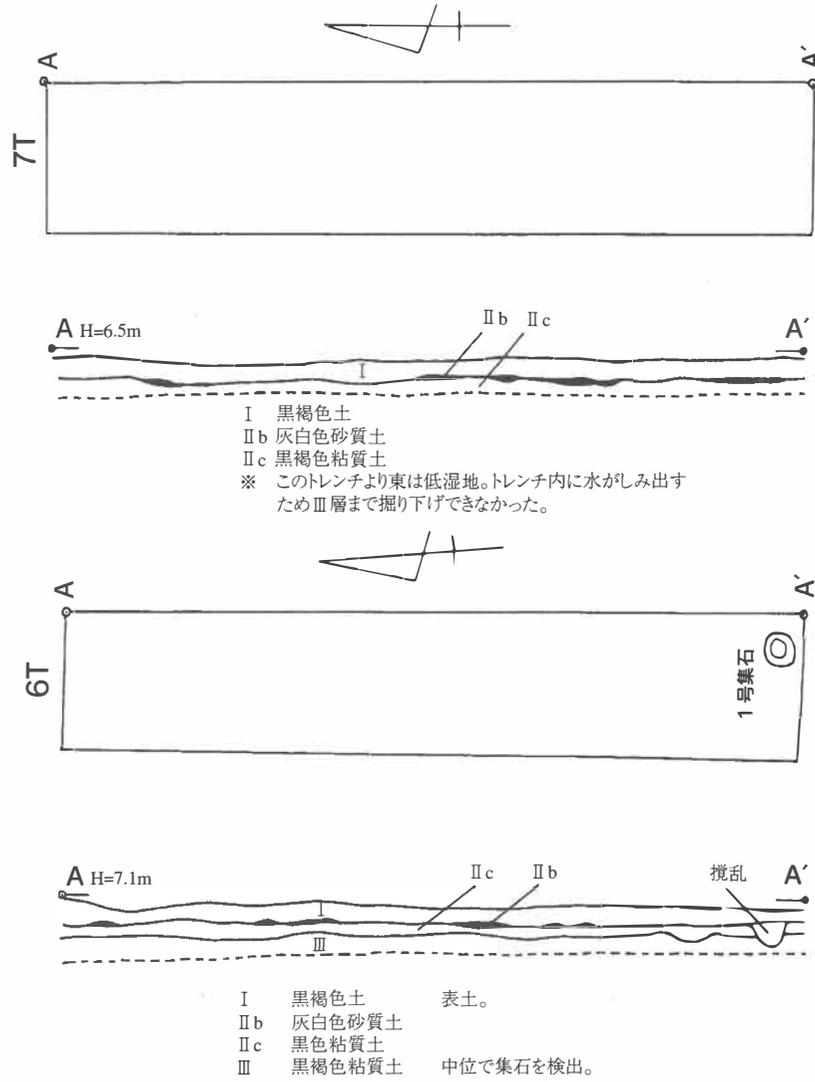
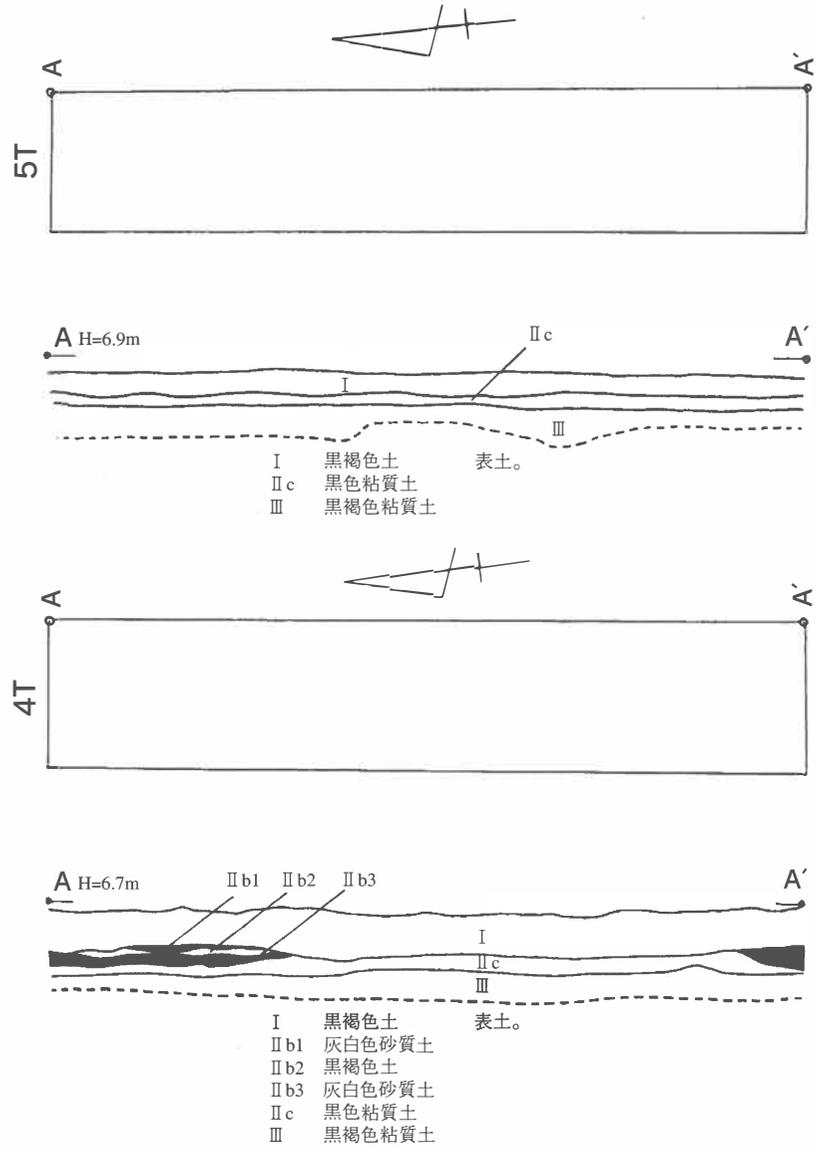


図21 前屋敷遺跡トレンチ子図 (4T~7T)



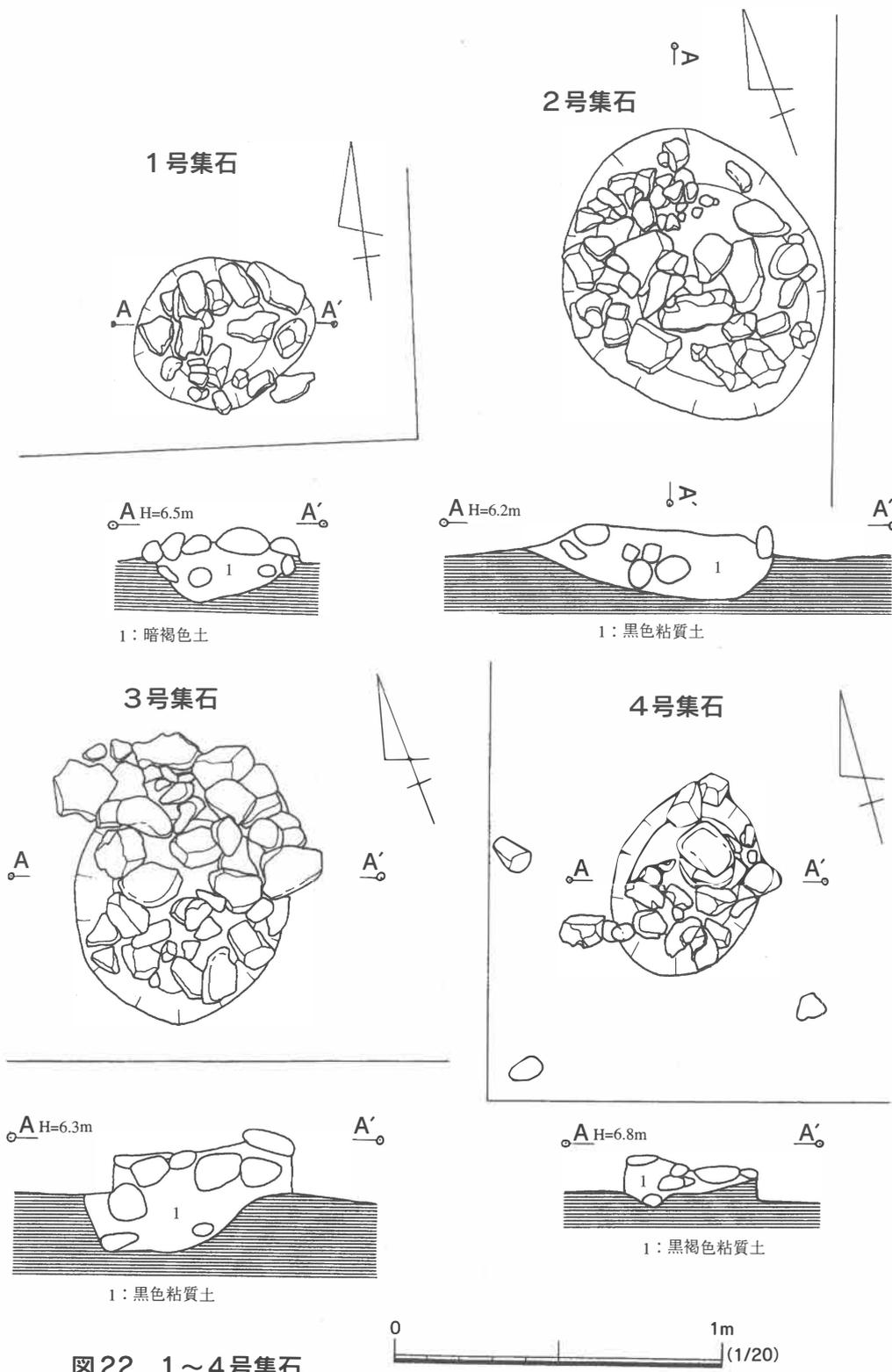


图22 1~4号集石

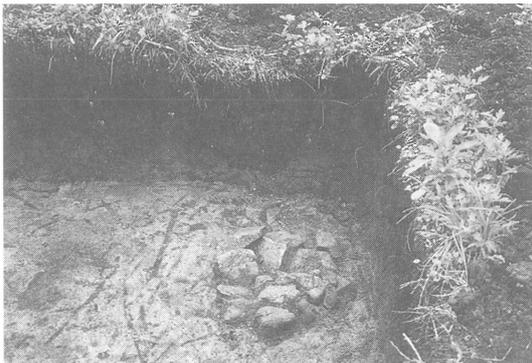


写真1 1号集石(西から)

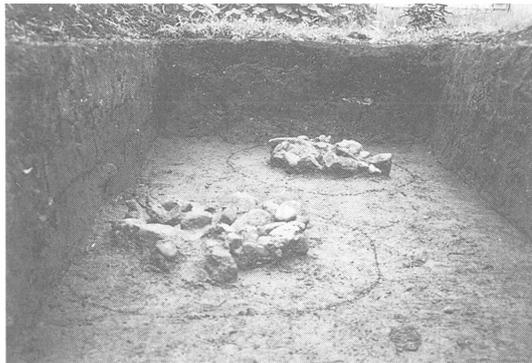


写真2 2号(前)・3号(奥)集石(北から)

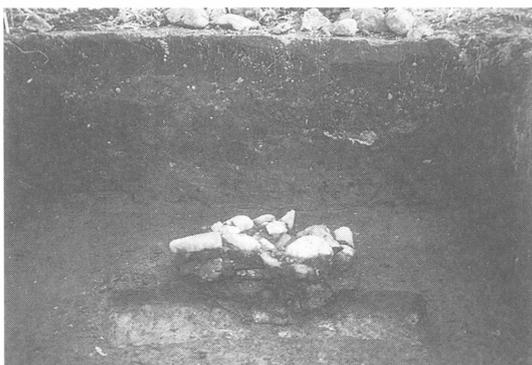


写真3 3号集石セクション(北から)



写真4 4号集石(北から)



写真5 3T遺物出土状況(南から)

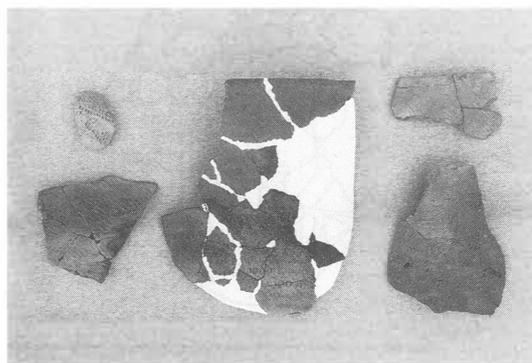


写真6 縄文時代前期 深鉢

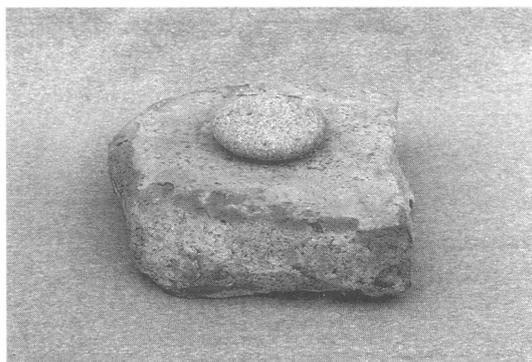


写真7 縄文時代前期 石皿・磨石

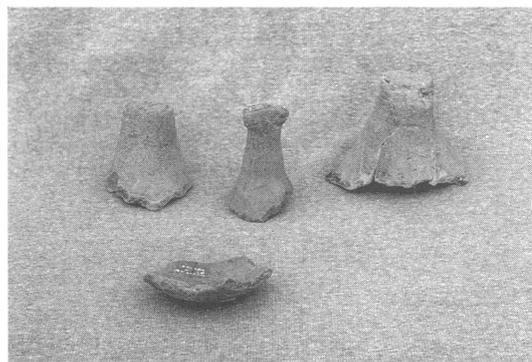


写真8 古墳時代前期 杯(前)・高杯(奥)

第5節 新橋横穴墓群 (遺跡番号20600068)

所在地 原町市上太田字新橋8、179-2、179-3、244-1、244-2、245、271-9

調査期間 平成10年11月25日から11月27日まで

対象面積 2,600 m²

調査面積 75 m² (試掘率2.9%)

事業内容 農道付替え工事に係る保存協議の資料を得るための試掘調査

調査担当 堀 耕平

遺跡概要

本遺跡は太田川に開析されて形成された低位丘陵山腹に立地し、標高は50～70 mを測る。北側には国指定史跡である羽山装飾横穴墓が所在し、6基の横穴墓とともに群を形成している。南東側には市内で唯一の前方後円墳である、長さ約40 mを測る与太郎内古墳が所在している。本遺跡は以前から横穴墓群として周知されているが、確実な横穴墓の確認はなされていない。

調査概要

はじめに現地踏査し開口あるいは陥没した横穴墓の把握を試みたが、確認できなかった。調査対象地の現況は山林でブッシュが陰しくトレンチの設定は容易ではなかった。トレンチは杉の植林や雑木の中に、1×5 mの大きさを基本に15か所設定した。

平坦な場所でのトレンチは、地表から15～20cmで第三紀に形成された泥岩の基盤層、あるいは第四紀に形成された黄褐色粘土層に達する。斜面でのトレンチは、深いところで1 mであった。

調査成果

遺構、遺物は検出されなかった。

所 見

現地踏査及び試掘調査で遺構・遺物は検出されなかったため、開発に際して発掘調査は必要としないが、慎重な工事を要する。

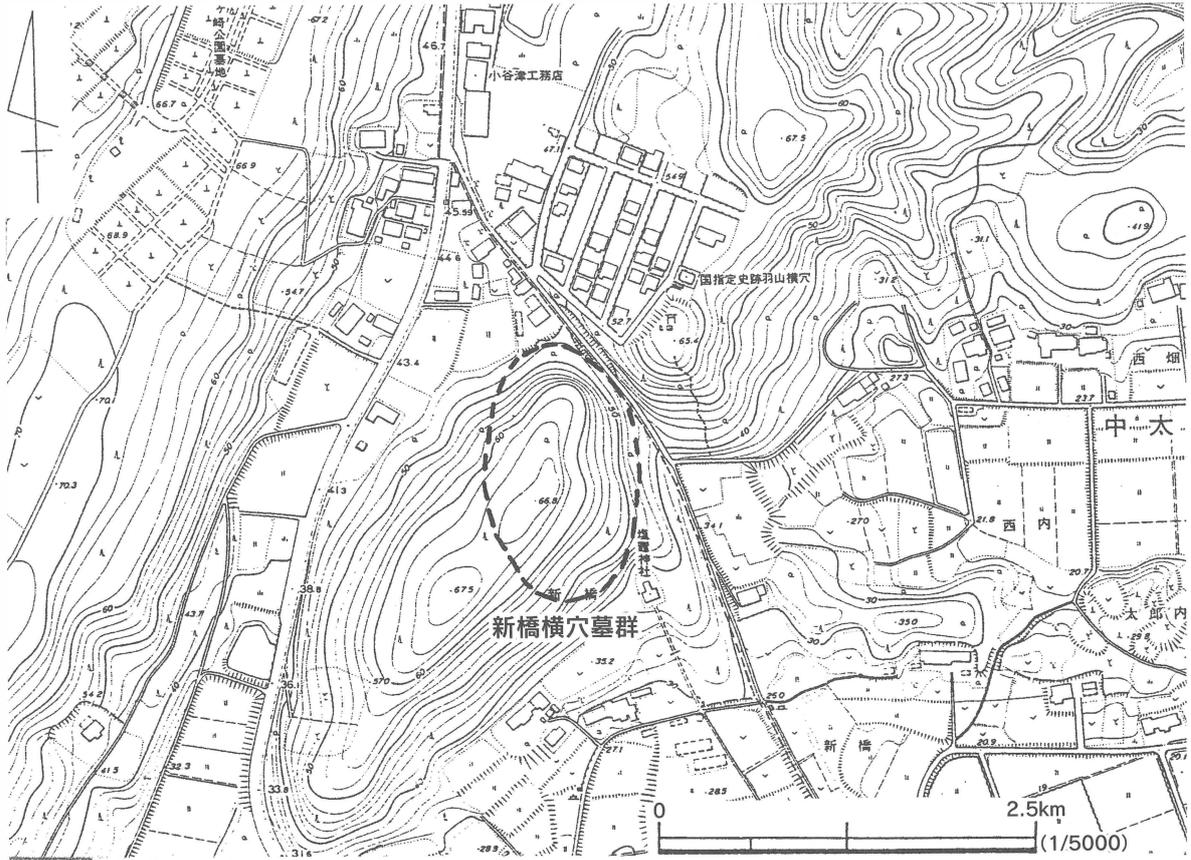


図23 新橋横穴墓群位置図

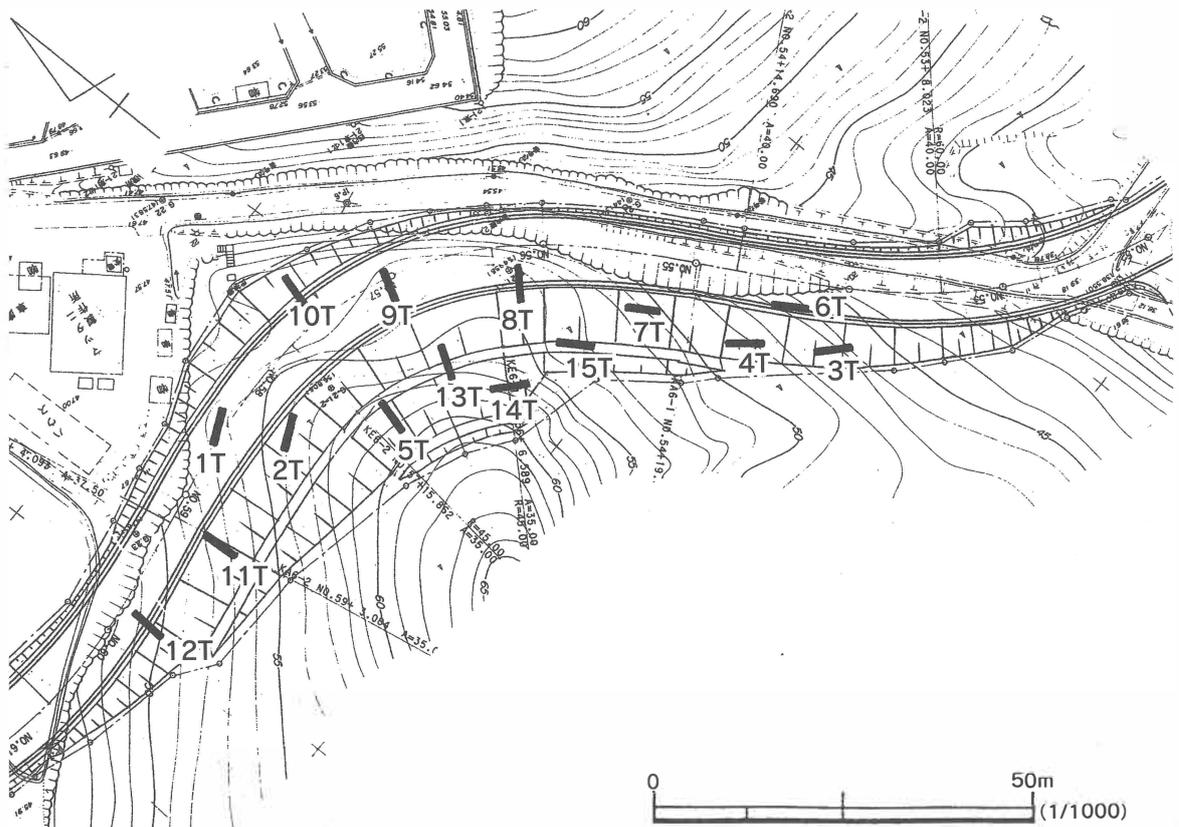


図24 新橋横穴墓群トレンチ配置図



写真1 遺跡近景(北西から)



写真2 第3号トレンチ



写真3 第7号トレンチ



写真4 第10号トレンチ



写真5 第12号トレンチ



写真6 第14号トレンチ

報 告 書 抄 録

ふりがな	はらまちしないいせきはくつちょうさほうこくしょよん						
書 名	原町市内遺跡発掘調査報告書 4						
副 書 名	平成10年度試掘調査 竹花A遺跡（第3次調査）・泉廃寺跡（第8次調査）・泉廃寺跡（第10次調査）・前屋敷遺跡（第3次調査）・新橋横穴墓群						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第18集						
編 著 者 名	鈴木文雄・堀 耕平・荒 淑人						
編 集 機 関	福島県原町市教育委員会生涯学習部文化課						
所 在 地	〒975-0012 福島県原町市三島町二丁目45番地 Tel 0244-24-5284						
発行年月日	西暦1999（平成11年）3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
竹花A遺跡 （第3次）	原町市高字 山梨	07206 00162	37° 36' 40"	141° 35' 40"	19980417 ～ 19980601	930 m ²	店舗敷地 造成
泉廃寺跡 （第8次）	原町市泉字 町池	07206 00097	37° 38' 50"	141° 0' 40"	19980609 ～ 19981215	8,000 m ²	県営ほ場 整備事業
泉廃寺跡 （第10次）	原町市泉字 館前	07206 00097	37° 36' 40"	141° 01' 10"	19980608 ～ 19980826	3,200 m ²	県営ほ場 整備事業
前屋敷遺跡 （第3次）	原町市上渋佐 字北谷地	07206 00106	37° 38' 00"	141° 0' 20"	19980701 ～ 19980710	128 m ²	宅地造成
新橋横穴 墓群	原町市上太田 字新橋	07206 00068	37° 36' 40"	140° 57' 30"	19981125 ～ 19981127	75 m ²	農道付替 え工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 構	特記事項	
竹花A遺跡 （第3次）	集落跡	奈良・平安	溝跡9条		土師器・須恵器・ 鉄滓・陶器		
泉廃寺跡 （第8次）	官衙跡	奈良・平安	掘立柱建物跡34棟 ・柱列3列・溝跡99 条・竪穴住居跡1軒 ・土坑20基		土師器・須恵器・瓦・ 陶磁器		
泉廃寺跡 （第10次）	官衙跡	奈良・平安 ・中世	掘立柱建物跡3棟・ 溝跡15条・ 土坑7基・ 井戸跡5基・整地層		土師器・須恵器・瓦 ・木製品・中世陶器		
前屋敷遺跡	集落跡	縄文・古墳	集石4基		縄文土器・土師器		
新橋横穴墓群	古墳	古墳	なし		なし		

原町市埋蔵文化財調査報告書第18集

原町市内遺跡発掘調査報告書4

平成11年3月29日発行

発行 福島県原町市教育委員会
〒975-8686
福島県原町市本町二丁目27番地

印刷 有限会社ライト印刷
〒975-0073
福島県原町市北新田字信田370-1